
魔法少女戦艦いずみ

MUSE@雨樹義和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女戦艦いずみ

【Nコード】

N3085Y

【作者名】

MUSE@雨樹義和

【あらすじ】

神楽早苗は料理が得意で、ちょっとした魔法も使える家事手伝い。ある日、早苗は日本海軍から「魔女っ子」の認定を受け、スカウトされることに。海軍で早苗を待ちつけていたのは、最新鋭魔法戦艦「いずみ」艦長の座。さらに連合艦隊最強を謳われる五人の「戦う魔女っ子たち」が早苗のもとに集結する。なんで自分が戦艦の艦長なんかに——早苗の戸惑いなどおかまいなく、魔法戦艦いずみは粛々と出航し、魔力渦巻く戦場へと飛び込んでゆく。毎週月曜更新、全10話。

第一話「魔法の家事手伝い」(前書き)

本作は完全無欠のフィクションです。魔法の軍事転用は大変危険です。すのでおやめください。

第一話「魔法の家事手伝い」

警報が響く。

ほの暗い空間。その中央部。

回転灯の赤い瞬きの下、小さな人影が七つ、じつと並び立ち、何事か待ち受けている。

「——もうすぐだよ」

誰かひとり、静かにつぶやいた。
少々鼻にかかった、ささやき声。

「全員、いるよね？」

そう訊ねるのへ、「そろってる」と、また誰か、短く応えた。
ここは巨大戦艦の腹中。

回転灯の明滅に鈍く輝くジュラルミンの内壁と、黒光りする鋼鉄の床。

そこへ、まるで場違いなもののように、一群、楚々と並ぶ立ち姿いずれも少女。年の頃は十歳前後から、せいぜい十代前半くらいまで。

それぞれ、ちょっと個性的な資格好をしている。

袴姿にフリルとリボンを配した和洋折衷。

あるいは、ショートドレスの胴と裾を絞った変形ミニドレス。

また、重厚に黒光りする西洋甲冑にフレアスカート。など——。

みな既存の服飾力テゴリから相当に逸脱していながら、普段着のように自然に着こなしている。

あきらかに尋常な集団ではなかった。

「今日は、どこが来るの？」

一同で最年少らしき娘が尋ねた。

誰かが微笑んで応じる。

「パープル・リッジと、護衛の戦艦が三隻。第七艦隊の主力ね」

「メリュ、出てくるかな」

「出てくるでしょ。あの子はあなたに任せるからね。あたしたちじや手に負えないし」

ところへ。

それまで、けたたましく響いていた警報ブザーが、ふと鳴り止んだ。

「発進口、展開」

壁面のスピーカーから艦内放送が流れる。

低く唸るような機械音が一帯へ轟いた。

二度ほど、激しく打ち叩くような金属音が響き、ジュラルミンの天井が鳴動しはじめた。

それは巨大な可動式天蓋である。ぶ厚い天板を鋼鉄の歯車とレールでスライドさせ、上甲板の内側へ収納して、天井を開け放す仕組みだった。

少女らが顔をあげて見守るなか、歯車の軋みも高らかに天板の移動収納が始まり、かわって頭上には、よく晴れた青空が次第にのぞきはじめた。

沖天より陽光燦爛と滑り落ちて、少女らの瞳をきらめかせる。

艦内放送が告げる。

「リフトアップ、スタート」

重々しい轟音とともに、少女らを載せた鋼の床が、天へ向かって、急激にせり上がってゆく。

この空間——床面積十五メートル四方、高さ十メートルほどの特殊区画、スタンバイフロア——は、それ自体が巨大なエレベーターリフトであり、天蓋の収納と連動して、内部に待機する少女らを、床ごと、この戦艦の上甲板へ押し上げてゆくのである。

ほどなく。

戦艦の先端近い前甲板上。リフトアップを完了し、陽光のもと颯爽と少女らは姿を現していた。

各自、なにか武器や道具のようなものを手に手に携えて武装し、見るも威風凛々のたたずまい。

ある者は、自分の身長ほどもある白い和弓を腰にさげている。

ある者は、先端に大粒の赤い宝石を据え付けた、鮮やかな緋色の短杖を、右手にしっかりと握っている。

また、刃に複雑な象嵌が施された大斧を両手で斜めにかざす者。

白銀の柄に三尖刃という、巨大な戟だか槍だかを脇にかいこんでいる者もいる。

いずれも現代的な武器ではない。実用よりは、典雅さや優美さを重視した美術品とか工芸品、あるいは祭器などに近いもののように見える。

太陽に照り映えるまばゆき刀槍鉾刃。それを掲げる少女らも、まるで戦場の小さな女神でもあるように勇壮堂々と、その顔つきも双眸煌々、なにやら力強い覚悟をみなぎらせていた。

「みんな、しっかりね」

年長らしき少女が檄を飛ばす。

全員、静かにうなずきあった。

それが合図のように、少女たちは眦を空へ向け、一斉に小さな身体を宙へ躍らせ、遙かに雲塊群れたつ空へ——続々、そこから飛び立っていった。

このなんとも常人離れた少女たちの集団は、日本海軍に所属する魔女っ子の一部隊である。

彼女らは本来、肉体的にも精神的にも、普通の女子児童と変わりはない。ただ尋常でないのは、各自、様々な事情によって、多種多様な超常の能力を授かっている、という点にある。その手にある古めかしい武器や祭器も、骨董の飾り物ではなかった。それは現代兵器をも凌駕する驚異的な破壊力の源泉、魔法の武器である。

強大な魔力を駆使して戦場に君臨し、それぞれ、守るべき何かのために、戦い抜くことを誓いあった少女たち——現代における戦争代行者。

それが、戦う魔女っ子たちである。

母艦を離れて天高く舞い上がるや、魔女っ子たちは、花火のように四方の空へ散開した。

高度二千五百から三千メートルあたり。おのおの武器をつがえ、身を構え、はるか南方を睨まえつつ、「敵」の来襲を待ち受けている。

彼女らには組織的な統率や連携などの意識はあまりないようで、それぞれ単独で、思い思いの位置に好き勝手に陣取っている。

その無秩序な集団の先鋒一点。ことさら人目をひく色鮮やかな紅衣に緋色の杖、その長髪も燃えるごとく紅に染まる、さながら炎の化身とも見える少女の姿がある。

池上美佳、九歳。

金のティアラを輝かせ、紅蓮の裳裾を風にはためかせながら、魔法の宝杖「プリンセス・バーナー」を握りしめ、ふと眼下を眺めおるせば、鏡のような洋上、悠々進む彼女らの母艦、魔法戦艦「かわち」の英姿がのぞまれる。

全長二百六十五メートルという巨大戦艦も、かかる高空からは小指ほどにも見えず、まして周囲の護衛艦などは、盤面に散る硝子の欠片にひとしい。

「——そろそろかな」

呟いて、美佳は南方の空をふり仰いだ。「敵」の気配は次第に強まり、彼我の距離も、はや至近と念じられる。

広がる蒼穹。その一面に、無数の白い光芒がぱつと瞬いたとき、美佳はすでに迎撃の姿勢をとっていた。

——その美佳のもとへ、きらびやかな流星のごとく、ひとすじの閃光が駆けてゆく。

光輝く長衣をまとう長身長躯の少女。

黄金に流れる髪をなびかせ、岩をも砕かんばかりの巨大な騎士剣を両手でひっさげ、勇壮熾烈、ただならぬ気迫に満ち満ちたその姿は、まさに天を翔ける戦乙女そのものと見えた。

「ミカさんっ！ 今日こそ、騎士の誇りにかけて、あなたを斬りますッ！」

咆哮一声、風を切って迫り来る金髪少女へ、美佳は、首をかしげつつ、不思議そうに問いかけていた。

「ねえメリユ、なんで、いつもそんなに怒ってるの？」

「私の名前は、メルですッ！ 何度いえばわかってもらえるんですか！」

二人の周囲では、すでに他の魔女っ子らが、それぞれの戦いをはじめている。

天駆ける色とりどりの光彩、四方へ轟く爆音、激突、睨みあい、攻める者、防ぐ者。一対一で対峙している者らもいれば、複数入り乱れ火花を散らす者らもいる。

ここにおいて、現代の国家間における限定戦争、その最重要局面

——魔法艦隊戦の幕が切って落とされた。

艦隊戦というものの、彼我いずれの魔女っ子も、隊列も秩序もなく放縦に動き回っており、この場に軍隊らしい組織的な戦術や指揮、統制の概念は見い出せない。

由来、魔女っ子どうしの戦闘は、敵も子供、味方も子供、互いに私の強い年頃であり、乱戦になるのは必然だった。いちおう監督役である職業軍人らによって、事前にさまざまな計画や作戦が練られるが、いざ戦端を開けば所詮机上のもの。概ね忘れられるか無視されるか、いずれにせよ、大人たちの容喙など、あまり実戦では用いられなかった。

結局、ただ力の限り戦い、敵を退け、最後に残った側が勝者として戦略目的を達成する。それが現代戦において確立されている、最低限度のルールとされていた。

魔女っ子が戦場の主役となつてより、すでに二百年余。戦争の様相は、かくも粗野な、しかし誰の目にもわかりやすい単純な力比べへと変貌し、誰もがそれを当然のことと受けとめていた。なぜこうなったか——などと、疑問をさし挟む者もない。

「いいですかミカさん。世間では、私とあなたが、いいライバルが何かみたいに言われてますけど。私は、あなたみたいに、人の名前もきちんと発音できないような失礼な人、大嫌いですから！」

金髪の魔女っ子——メル・トケイヤー。アメリカ海軍所属、十一歳。その通り名も、ユタの剣姫、という——美しき眉に怒気をたたえ、光り輝く剣を大上段に振りかぶるや、美佳めがけて飛びかかり、白刃、烈風の唸ることく打ち下ろす。

美佳は、小鳥が宙に踊るように、軽やかに身を翻し、「お返し」とばかりプリンセス・バーナーを突き出した。

その唇が、わずかにうごめき、何事か呪文をつぶやく——。たちまち、魔杖の先端より紅い爆炎が渦を巻いて、メルへ襲いかかった。

「こんなもの！」

メルは大剣一颯、風をおこし、炎を消しとばした。

「おおー。その剣つて、そんなこともできるんだ。凄い凄い」

美佳は、ほがらかに笑って、はやしたてた。

「ふんッ！ 騎士たるもの、これくらいできて当然でしょう」

「……ねえメリユ、前から聞こうと思ってたんだけど……騎士って確か、お馬さんに乗ってるんじゃないかったっけ」

問われて、一瞬、メルの表情がこわばった。

「う——そ、それは——き、騎士とはつまり、その精神ですから。

馬はなくとも、騎士道を知り、実践する者を、すなわち騎士というのですッ」

「そうなの？」

「そ、そう。たぶん……ともあれっ、無駄話はここまで！ 本気でいきます！」

ふたたび、両者は身構えた。

二人ともに、きつと視線を交わしあい、意識を集中し、魔力を高めてゆく——。

どちらが先に動いたか。

光の剣と炎の杖が激突する。

閃刃。業火。魔法の威力が空を裂き、旋風と旋風の巻きあうごとく、二十余合、二人は息もつかず争い続けたが、接近戦では力量互角らしく、なかなか容易には決着がつかない。

そこへ。

海面より数条の火箭が伸びてきて、不意にメルの中をかすめ去った。美佳の母艦、戦艦かわちの対空レーザーである。

魔女っ子は、その不可思議な魔力によって、あらゆる通常兵器を無効化する。魔女っ子以外の攻撃では、ほとんど傷つくことはない——だから、仮にレーザー砲の直撃を浴びても滅多に怪我などないが、しかしメルの注意をそらし、集中を途切れさせる程度の援護効果はあった。その一瞬の間隙を美佳は見逃さなかった。

「スキありーっ！」

美佳の声に呼応し、プリンセス・バーナーの先端部に強烈な光輝が浮かびあがる。そこから、おびただしい火炎熱風がほとばしり、唸りをあげてメルへ襲いかかった。

身構える間もあらば——吼え猛る爆風は、枯葉のごとく軽々、メルをその場から弾き飛ばしていた。

「きゃああああー！」

絶叫遠く、メルの姿は彼方の空から海面へ、放物線を描いて墜ちてゆく。

「……おおー。……勝った……かな」

美佳は大きく息をついて、遙かな海を見おろし、額の汗を拭いた。「メリユのことだから、たいしたケガはしてないよね。あとでキャプテンにお礼いっとかなきゃ」

しみじみ呟きながら、周囲を見回してみる。

日米魔女っ子の戦闘は、なお継続中である。日本勢はかなり押されている様子で、すでに戦闘不能に追い込まれ、離脱した僚友もいるようだった。

「んー……あっちも、なんとかしないと」

プリンセス・バーナーを握りなおし、美佳はあらたな戦場を求めて、風に身を躍らせ、飛翔していった。

神楽早苗は大阪北部のベッドタウンに生まれ育ち、平凡な成績で大学へ入り、平凡な成績で卒業した。

その後は、就職せず、結婚もせず、ひたすら実家にあつて、家事手伝いの日々をもう四年も続けている。

「そのうち、いい男みつけるから……」

周囲には、こう口ぐせのように語るが、二十七歳という年頃にして化粧つ気もなく、服飾に気を遣うそぶりもなく、そもそも市街へ出ることも滅多にしない暮らしぶりです、誰もそれを真に受ける者はいなかった。

四月下旬の昼下がり。

ベッドで惰眠をむさぼっていた早苗は、自室の大型情報端末——ほとんどゲーム用途くらいでしか使っていない——からの呼び出し音で目をさました。

「ああ……なによ、もう……」

睡眠をこすり、けだるげにベッドから這い出し、キーボードに指をのせる。

ほどなく端末モニターの主電源が入り、同時に怒声が轟いた。

「早苗っ！ テメエ、まだ寝てたのか！」

「お、おおお母ちゃん？」

奇声とともに、早苗は、はね起きた。

「おうよ、テメエの母親だよ！ 悪いか！」

映像パネルに浮かぶのは、眉目うるわしき女性の姿である。

ウェーブのかかった長い黒髪、濡れるような睫。赫怒に歪む口もとさえ凜然と整って、「お母ちゃん」という単語が、あまり似つかわしくないような、そういうみずみずしい美貌であった。

「いえ、あの、ご、ご機嫌いかが……」

「よろしいわけねえだろ！　こんな時間までゴロゴロ寝やがって。どうせ毎日ゲームばっかやってんだろが」

「そ、そんなことないよ、家事くらいはちゃんと……」

「やって当然だろうが、いま teme は居候も同然の身だぞ？　一体いつになったら、いい男とやらを連れてきてくれるんだ」

「あー……はは、は……。で、あの、お母ちゃん、いまどこに……？」

「ああ、成田に向かっていると。空港に入っちゃまうと、手続きやらなんやら忙しいから、その前に、と思ってな」

どうやら、母親は車中から携帯端末で接続しているらしい。

早苗は、少々首をかしげた。

「また急な仕事？」

「そうだ。まだ当分、戻れそうにないな」

「そう……」

「そういうことだから、家のことは頼むぞ。帰ったら窓枠の埃、チエックすっからなア」

（……どこの小姑じゃ）

早苗は内心苦笑いしながらも、「はいはい、ちゃんとやります」と、愛想よくうけおった。

やがて端末の映像が消え、部屋に静寂が戻ると、早苗は肩を落とし、大きく溜め息をついた。

（いつもながら、なんていうか——あれで、五十近いんだもんない……）

早苗はこの小さな二階建ての家に、母親の瑠衣と二人で暮らしてきた。

父親は早苗が十二歳の頃に病没している。瑠衣も仕事で世界中を飛び回っており、あまり家には戻ってこない。二人暮らしというのはものの、この十数年、早苗は実質ひとりで家を預かっているような状況だった。

（……ああ、もうお昼過ぎてる）

早苗は、あわてて階下へかけ降りた。

この日は約束があつて、夕方までに、大切な客が訪ねてくることになっている。

愛用のエプロンを締め、いそいそとキッチンに入ると、早苗は饗応の下ごしらえにとりかかった。

早苗の唇から、なにやら呪文めいたささやきが、吐息のように、そつと洩れ出す。

包丁を握ると、その刃が白くまばゆく輝いた。

おもむろに俎板へ向かい、一心に野菜を刻みはじめる。

三秒でキャベツ一個を千切り、二秒で大根の皮を剥ぎ取って細切れ、一秒足らずで魚を三枚におろす――。

目にも止まらぬ早業。人並の手際とも思われない。

早苗のエプロンが、陽光を受けた真珠のように、つややかに輝いている。やわらかな乳白色の光が、エプロンから早苗の全身へと伝い広がり、早苗に何かしらの力を与えているようだった。

早苗は、歴とした「魔女っ子」である。

ただし、いわゆる「戦う魔法少女」たちと違って、その魔法は限定的なものだった。せいぜい料理を手早く上手にこなせるという、ささやかな能力に過ぎない。

早苗自身は、なくても特に困らないが、便利だとは思っている。

その程度の「魔法」であつた。

材料の下ごしらえを終えると、早苗は鍋に火をかけ、ふと手を休めた。キッチン傍らに備え付けられたテレビモニターの電源を入れる。

「……以上、京都、加茂川から、中継でお送り致しました。続いて本日の大本営発表、担当は辛光アナウンサーです。辛光さん、昨日は大変な騒ぎでしたねえ」

「はい、辛光です。先日、強敵アメリカ太平洋艦隊を相手に、久々の大戦果を挙げた日本海軍魔法艦隊。その戦闘から三日後となる昨夜午後十時、呉軍港へ凱旋をはたした魔法艦隊は、詰め掛けた報道

陣と関係者、ファンの方々の盛大な出迎えをうけ、……あ、これ、映像出てますか？　これですね、ご覧のとおり、もう大変な人だかりで、艦隊首脳の方々もなかなかタラップから降りられないほど、熱狂的な歓迎ぶりでした」

「ああ、これはすごいですねえ」

「今回の戦果ですが、一度の会戦で二十四名を撃墜というのは、日本の魔法艦隊はじまって以来、四番目という大記録なんです。しかも投入戦力は日本側が七名、アメリカ側二十六名と圧倒的な開きがあつて、さすがに厳しいといわれていたんですが、終わってみればアメリカ側は戦力のほとんどを喪失したのに対し、わがほうでは二名が軽傷を負ったものの、それ以外には大きな被害もなく、今次作戦の最終目標であります伊豆諸島周辺海域、その制圧奪回にも成功しました。まさに完勝ですね」

「辛光さん、それでですね、今回の、まさに大戦果だったわけですが、海軍のほうではその勝因を、どのあたりにあつたと判断してるんでしょうか」

「海軍の公式コメントについては、夕方ですね、鈴木海軍大臣の記者会見を待たねばならないんですが、いま手許にあります大本営発表資料を見る限り、コードネーム、魔法の熾天使ミカ……、この方のスコアが実に驚異的でした、単独で撃墜十九、アシストも二、記録しています。やはり、彼女の大活躍こそが勝利の原動力になったとみて、まず間違いないと……」

鍋が煮えた。

薄暮の頃。

インターホンが鳴り、待ち人の来訪を告げた。

早苗が玄関のドアを開けると、満面の笑顔とともに、小さな子が、胸もとへとびこんできた。

「ばーんっ！」

「おーっ、元気そうだね！ おかえり、美佳ちゃん」

「ただいま、サナおねえちゃん」

いまや海軍にその人ありとうたわれる魔女っ子。コードネーム「魔法の熾天使ミカ」こと池上美佳は、そう朗らかに応じて、白い歯を見せた。

いま、美佳の髪は、戦場にいたときと異なり、つややかな黒髪である。服装も、そこいらの同年輩の少女らと変わりばえはない。荷物は足元のスポーツバッグひとつ。何を詰め込んだものか、やけに大きく膨らんでいる。

「三ヶ月ぶりかあ。ちよつと背、伸びたね」

「ちゃんと、好き嫌いしないで食べてるから。サナおねえちゃんに言われたとおりに」

「うん、偉い。それに、大活躍だったってね、テレビでやってたよ」

「そりゃもう、頑張ったもん」

「じゃあ、今日はそのへんの話、聞かせてね。美佳ちゃんの好きな物、いろいろ準備しといたから。泊まっていくでしょ？」

「うん！ お父さんもお母さんも、帰りは明日になるって言ってたから」

言いつつ美佳は、子犬のような仕草で早苗にじゃれついてくる。

早苗は笑みを浮かべた。

「お隣りさん、いつも忙しそうだもんね。うちもだけど」

神楽家と池上家は、もともと隣りどうしで、親の代からそれなりに交流があつた。

早苗と美佳は、年齢はずいぶん離れているが、お互い一人っ子で、親が仕事の都合で滅多に家に戻らないという同じ家庭事情を抱えていた。早苗は美佳が生まれた直後から、実の妹のように美佳をかわいがり、世話を焼いてきたのである。美佳のほうでも、早苗を姉か、もうひとりの母のように慕って、ふたりは長年睦まじく過ごしてきた。

二年前、美佳が軍部からのスカウトを受けたことで、状況は大き

く変わった。美佳は両親や早苗と話合って、散々迷った末に海軍入りを決めた。それ以来、美佳は艦隊勤務となつて一年の大半を洋上で過ごすことになり、早苗はその帰りを心静かに待っている。二人はそんな間柄であつた。

——やがて、リビングにて、食卓を埋め、湯気をあげる、できたての料理の数々。

肉じゃが。ロールキャベツ。大根とキャベツのサラダ。そして美佳の好物の、白身魚のフライ——を前に、美佳は目をかがやかせた。

「わはぁー、おいしーっ。いただきます」

「デザートもあるからね。ゆっくり食べて」

「うん。……んー、おいしーっ！」

美佳は、満悦顔で、はずむように箸を運びはじめた。

嬉しそうにフライを頬ばり、こぼれるような笑顔を見せる。

早苗は、そんな美佳の姿に目を細めた。

「今回の休暇って、いつまで？」

「んー、とね。日曜日まで。それで、月曜日の朝、お迎えの車が来るから、って」

「三日か……今回は短いなあ」

「なんかね、新しい戦艦ができたから、あたし、そっちに移るんだって。あ、そうだ。あたしね、また昇進したんだよ。少佐になったの」

「へえ、じゃ、お小遣い上がるね。頑張ったからご褒美ってこと？」

「えへへ、そうだよ。でもねえ、上がっても、あんまり、使い道って思いつかないんだよね」

「じゃあ、お洒落しちゃえば？ 新しいお洋服とか小物とか買って」

「んー、よくわかんないよ、そいうのって。ね、明日、そいうお店連れてってくれる？」

「実はあたしも、あんまりそのへん詳しくないのよね。——よし。

あとで端末検索して、それっぽいお店見つけてさ、明日そこに一緒

に行くって感じで、どう？」

「うん、さんせー！」

軍属の魔女っ子というのは大抵、その能力をラボによって見い出され、軍にスカウトされた者たちである。軍属にも階級があり、実績に応じて進級する。ただ正規軍人のそれと異なり、魔女っ子の階級差は、かならずしも身分差を意味するものではない。せいぜい、経験や能力を示す目安、という程度のものでしかなかった。

その夜。二人は同じベッドに入り、遅くまで、こもこも語りあった。

美佳は、横になりながら、早苗の胸にしがみついて離れない。

早苗は、そんな美佳の頬に手をあて、撫でてやるのだった。

「ね、サナおねえちゃん。なんで、結婚しないの？」

「んー……結婚はねえ。相手つてもんが要るから……。あたしなんかと結婚したいって人、そういると思えないし」

「そんなことないよお。サナおねえちゃんって、お化粧とか全然してないのに美人だし」

「あはは、ありがと。そりゃまあ、本気で探せば、いるかもしれないけどね、そういう物好きな人。でも、なかなかその気にはね」

「あたしが男の子だったらなあ。サナおねえちゃんの、おムコさんになれるのに」

「ううん。いいの。美佳ちゃんとは、今のまんまで。……あたしは、充分だから。ね」

早苗は微笑んで告げた。

美佳は、わずかにまばたきしたが、やがて、「……うん」と、小さくうなずいて、早苗の胸に頬をうずめた。

大阪——といえば。

琵琶湖という水瓶から溢れ出た水が、山野を巡り、南北の流れと合して、いつしか近畿の東西を横切る大動脈となり、淀川の名をも

つて大阪湾へ注ぐ。

この淀川流域を北限として、南は和泉山脈、東は生駒山地まで続く平野部一帯を、総じて大阪平野と呼びならわす。

はるか千五百年の往古には、水の都といわれ、また商都としてもたいそう繁栄した地域と伝えられる。現代においては、行政単位としての大阪府という名称はあっても、運河や大規模商業地といった古い面影を偲ぶものはほとんど残されていない。

大阪平野の地表は、ここ百年来、相次ぐ整備改造によって一面コンクリートの海と化し、学校と研究施設と先端技術ベンチャーの高層建築群が妍を競うようにそびえ立つ学術都市へと変貌している。

西暦三四七二年。大阪学究都市。

土地の造成だけで六十年以上、各種大学の招致移転、施設建造におよそ四十年。近代的学問と研究の総本山として、人類の物理的、精神的進歩を目的に世界の頭脳が集い、日々これ研鑽、新たな発見と成果はここに相次いで、いまや大阪こそ人類の知識と知恵と新技術の集積地ならんと、日ごと世人の認識をあらためさせつつある巨大新興都市である。

大規模な都市整備の波は、大阪全域をくまなく洗い尽くし、旧時代の遺物をほぼ拭いさつていたが、わずかな例外はあった。文化財指定を受けた一部の史跡・建造物群がそれで、かつて新世界という呼称で親しまれた地域にも、そのような例外のひとつを見ることができる。外観はただ古色蒼然とした苔むす尖塔にすぎない。

塔の名を、通天閣という。

近年になってから外観を模して建て直したというものではない。幾度も改修されてはいるが、真正正銘、千五百年余の風雪に耐えてきた、きわめて由緒ある歴史的建造物であった。

この通天閣が、実際いかなる理由で現代にまで生き残り、またどのように用いられているか、ほとんど世間には知られていない。したがって、大方には色あせた文化財という認識しか持たれていないが、ここには日本軍の最高機密、陸海両軍部の共同直轄特別研究機

関たる魔法少女研究所——マジカル・ラボラトリーともいい、たんにラボとも呼称される——が設置され、日夜、多数の優秀な人材が、魔女っ子に関わるあらゆる情報の収集と、その分析とに明け暮れていたのである。

通天閣地下十八階。人材資源情報部。

広大なオフィス内に、東西の最先端企業に匹敵する贅沢な設備を揃え、豊富な資料と情報を駆使して、あらたな人材、すなわち魔女っ子を探索発見し、適性を分析し、関係資料を作成して軍部へ提出することが、この部局の主任務である。

軍部は、その資料をもとにスカウトすべき魔女っ子を選考し、さらに適性に応じた兵科、配置の振り分けを行っていた。そのため、軍部は人材資源情報部を戦力確保に直結する最重要部署と位置付けしており、予算の優先配分、優秀な研究人員の増強配置など様々な優遇措置を与えている。

「これ、あと何人いるの……」

デスクに突っ伏し、ため息をつく白衣の女性ひとり。

彼女のデスク上のホログラムモニターには、無数のウィンドウが開かれ、そのひとつひとつに、先日来、各地の情報員によって収集されてきた新たな魔女っ子たちの情報が、ところ狭しと記載されている。

白衣の女性は、肥田妙子という。

二十六歳の弱冠ながら、複数の博士号を持ち、人材資源情報部の部長をつとめる、自他ともに認める才媛であった。

ただ、コエタタエコという、回文のごとき自分の名前を嫌っており、周囲の者どもには、たんに「部長」とだけ呼ばせるようにしている。

「今年は豊作よねえ。なんでこう毎年毎年、魔法少女ってのは、出てきては消え、また出てきては消えるのかしら」

「それが解明できれば、まさに世紀の大発見なんですけどね。……ま、一杯どうぞ」

横あいから声をかけるのは、これも若い白衣姿の男である。

分析担当主任の肩書きを持つ井上和人、二十八歳。手にしたコーヒークップを肥田部長のデスクに置き、ウィンドウを眺め渡しながらつぶやく。

「ラボ創設から、はや二百年余り……。莫大な費用、最高の設備、綺羅星のごとく揃えられた優秀な頭脳……。そのすべてをあげて、ずっと研究を続けてきたにも関わらず、我々はいまだ、何ひとつわかってはいないわけですよ。そもそも、魔法というのは何なのか、その根本さえも」

魔女っ子。もしくは魔法少女。

下は六歳前後から、上はおよそ十八歳くらいまでの、ごく普通の少女が、ある日突然、特異な能力に目覚めて魔女っ子になるのだという。

その能力は各々でまったく異なり、魔女っ子となるきつかけや、魔力の源であるとか、そういう都合も各人各様に違いがある。

たとえば、親に買い与えられた人形やヌイグルミなどの玩具が、いきなり言葉を語り、持ち主の少女に魔法を授けた——だとか。空から杖が降ってきて、それを握ると魔法が使えるようになったとか。大病を患い、生死の境をさまよった後、何やら悟りを開いて、強大な魔法の力を得た、など。

その魔法の効果や威力も、一都市を殲滅する歩く天災のような者から、花瓶に花を咲かせる程度の、ちょっとした手品師くらいな者まで、一概に分類しえぬほど多岐に渡る。

しかも、この年頃のすべての少女が一律に魔女っ子になれるのではなく、ごく一部、何かしらの条件やら資格やらを満たした者だけの特権のようなものであるらしい。

また、魔女っ子がその魔法を駆使できる期間は大抵限られていた。わずかな例外を除き、およそ成人前には魔法の力は自然に抜けて、普通の女性に戻ってしまう。

なぜ、幼い少女に限って魔女っ子となれるのか。どのような条件、

いかなる資質が必要とされるのか。

そもそも、魔法とはいったい何であるか。

詳しい事は、今日まで、なにひとつ解明されていない。

記録によれば、魔女っ子は、西暦三二〇〇年代初頭、世界各地において突然、何万人という膨大な規模でもって同時多発的に出現したとされる。その不可思議な力は、たちまち世界中に大小無数の事件と騒動を巻き起こし、全人類を驚かせた。

文字どおり降って湧いた異常事態である。世界の各メディアは恐慌寸前に陥った。

ここで世間の注目を集めたのが、当時、各分野の第一線とされた科学者たちの動向である。彼らは相次いで魔法と魔女っ子への否定的見解を発表し、パニックの沈静化につとめた。科学万能をうそぶいてやまぬ彼らにとって、魔女っ子の出現は、自分たちの喉もとへ突きつけられた重大な挑戦だったのである。

学者らはこそぞって述べた——魔法など非現実的で、ありえないものである。自称魔法少女らの引き起こす種々の超常の力も、物理的な現象であることは間違いなく、必ずや科学的合理性に沿って説明できる、と。

主張を実証するには、まずサンプルを採取し、データを集めねばならない。必然、魔女っ子たちは、学者らの研究材料と目され、執拗な追跡調査をつける羽目になった。

珍獣狩りの標的にされてはたまらない。一部の魔女っ子たちはこの事態に反発し、あるいは逃げ回り、あるいは逆襲に打って出た。魔女っ子たちと学者たちの確執は世界各地で様々なトラブルを生みなかには地方都市が潰滅した例すらある。その一方、素直に協力を申し出る魔女っ子も少なくなかった。彼女らも、自分が何者なのか知りたかったのである。

そうして収集された魔法及び魔女っ子の各種データは、全世界を結ぶサーバーネットワークを介し、南極に新たに設置された巨大サーバー基地を軸として、逐一、各地の研究所へ送信され、大がかり

な分散共同解析にかけられた。

総勢二万人超に及ぶ、各分野の一流学者陣が、一大プロジェクトを組み、魔女っ子の能力、その根源となる何ものかについて、あらゆる物理法則、あらゆる方程式、あらゆる仮説理論にあてはめ、無数の仮定を立て、徹底的に実験分析を繰り返す――。

五年後、参加者ほぼ全員が降伏を表明した。

「魔法なる物理現象。その実在は認められるも、その原理、力学、いずれも甚だ不規則にして解析不能。我ら、いかなる手法をもってしても定理化するあたわず、……後進にすべてを託す」

当時の米国ヒューストン大教授リチャード・ムセ博士は、こうコメントを發し、この時点での唯物的科学の敗北を宣言した。

同じころ、京大教授の野田清作博士は、病身をおし、死の直前まで分析を続けながら、なにひとつ成果があがらず、最後に「私には……わからない」と言い残して、息を引き取っている。

ようするに、どの学者も、魔法というものがあまりにでたらめすぎて、解析もパターン化もできない、と匙を投げたのである。

膨大な維持費用を要する共同解析は、ほどなく沙汰やみとされ、南極の巨大サーバーも破棄された。以後は、各研究機関において、予算と人員の許す範囲内で、個別に解析にあたることとなり、日本をはじめ各国は、これまで得たデータを回収して、独自に魔法研究用のラボを建造しはじめた。

――数千年前。人類はウイルスの存在を知らず、その病を癒す方法もわからなかった。病原ウイルスの特定は、電子顕微鏡なる発明の出現を待ってはじめて可能となったのである。魔法もまた、現実に存在する現象ではあり、いずれ、いつその科学の進歩により、その謎を解明できる日が来るだろう――。

これもムセ博士の声明の一部である。

巨額の資金と無数の研究人員が投入された魔法解析プロジェクト。その終焉後に残ったのは、そういう半ばやくそ気味な希望的観測であった。

一方、この科学の断末魔に重なるごとく、新たなる研究学問の潮流、その産声も響きはじめていた。

魔法を研究対象とする人々の立場、アプローチは様々だが、彼らの根底にある思想は、おおまかに見て二極に大別できる。

かたや、あくまで頑なに、魔法なる現象の正体をどうにかして究明すべき、というもの。

かたや、より实际的に、魔法の有効利用を模索するべき、というもの。

魔法研究というジャンルの出現当初は、前者に携わる人々が圧倒的多数だったが、年々、後者へと移行が進み、いつしか、そちらが主流として幅をきかせるようになった。

たとえば、火を道具として用いるのに、あえてその原理や公式まで詳しく知る必要はない。火がもたらすメリットとデメリットを理解し、正しく制御することが肝要である。実際、原始の人類は、そのようにして火を我が物とし、活用してきた。

ならば魔法も同じことではないか？

そのよってきたるところを説明するのは、さらなる科学の進歩を待つとして、いま確かに実在する魔女っ子たち、その能力がもたらす様々な効果、これをいかにコントロールし活用すべきか、という実用的観点である。

「ブラックボックスには蓋をせよ。製造者責任は神様が負ってくださる……」だっけか。誰の言葉だったかしら」

肥田部長は、けだるそうな仕草で、カップに口をつけた。

「オレンジ・ベックフォード博士ですね」

井上主任が答える。

「確か、もとは優秀な女医さんだったのが、自分の娘がいつの間にか魔法少女になって空を飛んでいるのを目撃し、魔法研究者に転じた、とか」

「……あまり医者らしい発言じゃないわね」

魔法とは、ブラックボックス付の実用的新技術——ひとたび、こういう考え方が芽生えたとき、すでに世間は、魔法の存在とその有用性を認識し、種々の試行錯誤をはじめていた。

歴史における、ある約束事。すなわち火、火薬、核分裂、核融合、などの例に沿うごとく、魔法の軍事利用というものが、まず熱心に研究された。

索敵、攻撃、防御、移動、輸送、医療、通信、設営……、軍事に限っても、魔女っ子の想定応用範囲はきわめて広汎に渡るが、より効果的な運用方法を探るのには、実際に多くの魔女っ子を軍籍に招いて、事例を蓄積し、分析を重ねる必要があった。ここ通天閣のラボも、もとをいえば、そういう目的から設置された機関である。

「適性を調べ、適所へあてがえ、つてね……そりゃいいけど、こうも数があるんじゃ、時々やってらんなくなるわ」

肥田部長は、軽く頭を振って、デスク上のホログラフウィンドウ群を眺めやった。そこに示されているだけで、百名以上もの日本人魔女っ子の個人情報ひしめいている。

日本は、世界的に見ても魔女っ子の自然出現数が異常に多い地域である。これを追跡調査する側の負担も相当なものがあつた。

およそ七十人の情報員が、つねに日本全国を駆け巡り、噂や風聞をもとに魔女っ子を捜し出すのだが、いざ捜し当てた後も、その能力、人柄、家族構成など、可能な限りの個人情報を隠密裡に収集し、ラボに報告せねばならない。肥田部長は、こうして集められた膨大な資料のすべてに目を通し、各種の決裁を下すべき立場にあつた。

井上主任が肩をすくめて言う。

「なにせ、ここにある個人情報はすべて最上級国家機密。部長の裁可なしには、こちらで勝手に処理できませんから。今日も残業確定ですなあ」

「そんなこと、嬉しそうに言わないでよう……」

コンソールに指先を滑らせながら、肥田部長は、少し口元をとが

らせてみせた。

いくつかの顔写真付き詳細情報ウィンドウが拡大される。

「なんせ候補は多いけど、能力的には、いまいち軍隊に向いてない子ばかりなのよね。実戦要員限定だと、なおさら……」

「これなんかどうです？ 夢乃沙里、十二歳、属性A、適性B」

「遠距離攻撃属性か。結構珍しいかも。でもちよつと適性が弱くない？」

「では、こちらは？ 歌月舞衣、十歳、属性S、適性A」

「属性がね。今回は、もつと実戦向きの子が欲しいって、海軍からも陸軍からも言われてんのよ。これはパスかな」

「サポートとしてはかなりの能力があるようですが……ま、そういう事情では仕方ありません」

「他は……。えー。神楽早苗、二十七歳、属性S、適性D……」

ふと、肥田部長の指が止まった。

「なに、これ」

「なに……といわれましても」

「いや、こんなのが魔法少女って、ありえないでしょ。そもそも少女じゃないし。二十七って、あたしより年上じゃないの」

「はあ。何かの間違い……。いやしかし、うちの者が、そんな馬鹿げたミスをやらかした例なんて、いままで聞いたことがありませんが」

そこで、井上主任は、何か思い当たったように顔色を変えた。

「——まさか」

「な、なによ」

「部長、そのウィンドウの下のほう、そう右下の……」

「これ？ 付帯事項、ってあるわね」

「ええそれです、開いてみて下さい」

促されて、肥田部長はコンソールを操り、新たなウィンドウを開いた。

——三十秒後。二人は、顔を見合わせ、つぶやきあった。

「ケース四二七……。これ、本当に間違いないの？」

「確かにそう書いてありますね。しかも、うちの調査員とは別ルートから情報を押し込んできた形跡があります。事実なら、おおごとですよ、これは」

「主任。いますぐ担当調査員に確認を。裏が取れたら、指定どおり海軍に連絡して」

「承知しました」

井上主任は、やや緊張した面持ちで携帯端末を取り出し、ナンバーを打ち込みはじめた。

神楽家。

早苗の寝室。

端末モニターの向こうから、愉快そうな声が響いた。

「いやー、そうかそうか、うちの早苗がねえ、あはははは、いやー、面白い事もあるもんだねえ」

「お母ちゃん、笑いごとじゃないって」

早苗は無然とモニターを睨んだ。

デスク上には、海軍省から配達されてきた「選考通過報告」の封筒がある。

ラボによって軍隊への適性を認められた魔女っ子に対し、陸海軍いずれかがスカウトを決定後、当人宛に直接送付してくる機密書類で、いわば軍からのスカウト予告状である。内容を見ると、既に海軍省人事局によって「魔法の家事手伝いサナ」なるコードネームまで勝手に命名されていた。

モニター内の瑠衣は、さもおかしくてたまらない様子である。

「だってお前、笑いごとだよ、こりゃ、どう考えたってさ。魔法少女だぞ？ お前トシいくつだっけ？」

「だから、それは、さっきも言ったじゃないの。特殊なケースだって」

「いやまあ、わかってるさ。ケース四二七だっけ……あたしなんか、ずっとお前が当たり前みたいに魔法使ってるの見てるから、珍しいともなにも思ってたけど。それがまさか、百年に一人出るか出ないかってケースだったとはねえ」

ケース四二七とは。

魔女っ子には、およそ原因不明の年齢制限があり、成人前には次第に魔力も弱まって、普通の女性に戻ってしまふ。ところが、ごく稀に、二十代、三十代となっても、もとの魔力を維持し続ける例外的な魔女っ子が出現する。これがケース四二七で、その名称は、かつての魔法解析プロジェクトにおける四百二十七番目の被験者が、当時唯一の二十代の魔女っ子であったことに由来する。魔女っ子の発生以来二百五十年、歴代魔女っ子総勢三十七万八千人余のうちでも、記録に名をとどめるのは三名のみという、きわめて稀少な存在であった。早苗は、通天閣のラボにより、ケース四二七の四人目の該当者として正式に認定され、同時に海軍が獲得の意思を示してきたのである。

「ようするに、珍しいから確保しとこうってこったろ？　そうでもなきゃ、お前に軍からお呼びがかかるなんて、ちよつとありえねーだろうし」

「そりゃまあ。あたしの魔法なんて、あのエプロン着たときだけ、ちよつと料理の腕が上がるくらいで、軍隊なんかで役に立つようなもんじゃないし。そもそも、あたしはこの家から――」

「出るつもりはない、か？」

瑠衣の目もとから、ふと、笑みが消えた。

鋭い視線が、モニター越しに早苗を射抜く。

「どうしても嫌なら、断ればいい。軍属になるかどうかは、任意なんだろ」

「……う、うん」

「ただなあ。いいトシして家に引きこもってたって、なんもいい事ないだろうが。そりゃ今は戦争中だから、いったん軍に入れば、そ

う滅多にや帰ってこれないだろうが、家のことは、業者なりなんなりに任せときゃいいんだしさ」

「……お母ちゃんは、それでいいの？」

早苗の問いに、一瞬、瑠衣は沈黙したが、やがて、うなずいて応えた。

「いいさ。確かに、家に帰っても誰もいないってのは寂しいもんだけど。お前が、そのために、ずっと家にいてくれてるってのも、わかってたよ」

瑠衣の端麗な唇に、おだやかな微笑が浮かんた。視線もやわらいで、その表情にも声にも、母親らしい慈みが滲みだしている。

「でもな。もうそろそろ、お前も、自由に生きていいんじゃないか？ あたしや、死んだ父さんのために、いつまでも気を遣うことなんてないよ」

「お母ちゃん……」

「だからな、遠慮せず行つてこい！ だいたい、あの美佳ちゃんだって、海軍で立派に働いてんのに、姉貴分のお前がいつまでもゴロゴロしててどうすんだ。同じ海軍なら、端末から海軍専用の回線が使えるから、連絡も取りやすくなるだろ。そのほうが美佳ちゃんも喜ぶんじゃないか？」

「え、そ、そうかな？」

「おうよ。そんでな、ついでに軍隊のなかで、若くて使いでのある、いい男を探すんだよ。ちょうどいい機会じゃないか、ん？」

「あ……。それは、確かに、いい感じかも」

瑠衣の豪快きわまる物言いに、いつの間にやら、早苗もすっかりその気になっていた。

やがて早苗は、額をあげ、晴ればれと笑った。

「わかった。あたし海軍に行くよ」
かくて。

コードネーム「魔法の家事手伝いサナ」こと神楽早苗は、長年のひきこもり生活を捨て、日本海軍へと身を投じることになった。

魔法戦艦いずみ。

全長二百六十五メートル、全幅四十メートル、総重量六万トン。

主武装として十八インチ無限加速粒子砲三連装九門、五インチ対空熱線砲連装二十門、AMCジェネレータ四基。

新開発の水素変換エンジン搭載により、最大速力六十ノットを誇る、日本海軍の最新鋭艦である。

建造計画の初期段階においては、魔法戦艦「かわち」級の三番艦となる予定であったが、起工直前、軍令部の戦力整備計画変更にもなつてエンジンの換装を決定。あらためて新型として再設計を施された経緯を持つ。

新型エンジンの採用により、従来艦との比較において速力、主砲出力ともに飛躍的に向上しており、艦装面でも旗艦設備や魔女つ子運用施設の充実がはかれ、他に類を見ないほどの豪華な内装と抜群の居住性を擁している。

大型戦艦らしく、そのシルエットは重厚典雅に、海上の城郭ともいふべき壮大な外観は威容堂々と力感あふれ、まさに海軍の守護神というにふさわしい風格を備えていた。

連合艦隊、いや全海軍の輿望を担つて誕生した巨大戦艦。

その初代の艦長ともなれば、並々ならぬ重責である。当然、経歴実績よほどの人材にあらねばと、軍令部としても慎重に討議し、日々吟味を重ねていたが、やがて海軍省から新たな資料が提出され、軍令部内は突如、蜂の巣をつついたような騒ぎになった。海軍省の提示した新たな艦長候補について、軍令部内は推進派と阻止派に分裂し、喧々たる議論を戦わせはじめたのである。

「士気向上の観点からすれば、望ましい人選といえないこともない」

「艦長職など飾りのようなものだ。たいした問題ではない」

「これが実現すれば、虹十字と、わが海軍の関係は、より一層緊密なものになるだろう」

——などとする推進派に対して、阻止派は真つ向から噛み付いた。「軍属に戦艦を預けるなど、前例なき暴挙である。軍の秩序を何と思っているのか」

「虹十字との関係重視はわかるが、いきすぎではないか。媚態ととられ、今後、ことごとに足元を見られかねん」

「当人の資質に問題がありすぎる。到底、ものの役に立つと思えない」

会議場の激論は幾日も続いた。

争点は、なんといつてもまず、前例なき大胆な人事であるということ。さらに、候補とされるその当人に、艦長たる資質が到底見あたらない、ということにあった。

推進派は、艦隊勤務の経験豊富な古兵らが多数を占めている。いずれも、かつて最前線にあつて軍属の魔女っ子らと苦楽をともにしてきた、いわゆる歴戦の苦労人が揃つていた。

彼らはその経験ゆえか、意見も態度も受容性に富み、前例旧例へのこだわりもさほどには見受けられない人々だった。

「面白いではないか。やらせてみたら」

総論としては、大体そんな具合になる。

いっぽう阻止派には、比較的若い海軍エリートが多かった。若いといつても四十代かそこらにはなるが、海軍兵学校、海軍大学校を経て、キャリア参謀として軍令部入りをはたし、既存の海軍のシステムと秩序に則つて順調に出世してきた人々である。彼らとしては、本来海軍と縁もゆかりもない人物がシステムを無視して割り込み、あまつさえ軍属の身で正規軍人らを指揮しうる立場に就くなど論外な暴挙であった。

そういう感情論に加えて、その艦長候補たる人物が、まるで無能としか思えない点などからも、「けしからん話である」というのが、おおよそ彼らの総論となつていた。

この騒動の端緒を切った海軍省側は、軍令部内の推進派、阻止派のいずれにも加担しようとはせず、海軍大臣の鈴木剣太郎も「提案

はした。これ以上、何も言うことはない。結論はそちらで出せ」と、丸投げを明言していた。

やがて軍令部長の新房清和大将が自ら事態収拾に乗り出し、議論は一応のまとまりを見た。

——海軍省推薦の艦長候補とされる人物については、軍令部としてこれを了承し、今後予定されている、とある作戦の準備及び実施期間中のみ、新造艦いずみをその人物に預けることとする。ただし、あくまで期間限定の人事であり、当該作戦終了と同時に、すみやかに解任手続きを取り、そこから、あらためて人事をやりなおす、という結論に行き着いたのである。

この議論は、当初から、もっぱら軍令部の内輪もめに終始している。実際に魔法戦艦いずみを運用することになる連合艦隊は蚊帳の外であった。

その連合艦隊司令長官の小沢政三郎大将は、事後、軍令部より本件を通達されるや、烈火のごとく怒りをあらわし、柱島からジェットヘリで単身、霞ヶ関の軍令部オフィスへ乗り込んで、新房部長へ詰め寄った。

「戦況は一進一退、いまや国家の興廃も、わが海軍のここ一手にかかるといふ、きわめて重要な局面ではありませんか。いずみは、その局面打開を担う中核的存在であつたはず。それをあんな、軍人ですらない、ど素人に預けるなどとは。なぜかくも無茶な人事を強行されたのか」

口角泡を飛ばさんばかりな猛抗議に、新房部長は肩をすくめて、こう答えた。

「本件は、虹十字の、あのお嬢さんの肝入りでな。報告書を見て気付かんかったかね。苗字が同じだつたらうが」

「……なんですと？」

たちまち、小沢大将の顔色が一変した。

「では、もしや、あのお方の？」

先までの血色も一気に失せた様子で、驚きもあらわに訊き返す。

新房部長は、静かにうなずいた。

「君も知つとるだろう、岩戸作戦……あれに使うんで、戦艦、それも、現時点で最速最強のものに乗せてやって、南極まで連れてゆけと、そりやもうやかましく要求してきおったのだ。鈴木さんも、急にそんな話を持ちかけられて、ほとほと困つたらしいが。虹十字のほうも、よほど事態が逼迫しとるようだな。どうしても断れんかつたらしい」

「すると、岩戸開きの……」

「うむ。ようやく見つかったわけだ。灯台もと暗しとはこのことだな」

「しかし、だからと言って、いきなり艦長というのは」

「それも考えがあつてのことだ。一応、すでに軍属としてスカウトしておる以上、ゲスト扱いにはできん。戦闘には向かんから、他の子供らと同列に扱うのも難しい。といって下働きなんぞさせたら、後でお嬢さんからどんな因縁をつけられるか、想像するだに恐ろしいわい」

「そ、それはわかりますが……」

「ラボの資料を見ると、あまり取柄のない人物ではあるが、子供らとの親和性だけは図抜けておるようだな。そこを活用することにしたのだ。せいぜい鄭重に迎え、あとは優秀な補佐役をつけておけば、実務のほうも、そう支障はない。結局、わが軍の作戦上の要求と、虹十字側の要求と、その双方を踏まえて、こういう措置に落ち着いたわけだ」

こう諄々と説かれても、小沢大將は、なお承服しきれぬという顔つきで「むむ……」と唸った。

「頑固者め。まだ納得できんというなら、そもそもこんな話を急に持ち込んできた虹十字のほうに言うのだな。……その度胸が貴官にあるならば」

小沢大將は、一瞬、憤死せんばかりの形相で新房部長を睨みつけたが、やがて肩を落とし、深々と嘆息をついた。

「……どうも、やむを得ませんな」

——このときをもって、魔法戦艦いずみ、その初代艦長の座は、関係部署すべての承認を得て確定した。

以後は、ただ当人の到着、乗艦を待つばかりとなったのである。

「無理ですよ、そんな」

広島県呉市。

海軍呉鎮守府本部、正面ポーチ前。

早苗は、海軍のスカウトに応じた直後、担当官の案内で呉へと連れてゆかれ、そこで一週間の研修を受けた。

その研修最終日の午後のことである。

呉は、千五百年の歴史を閲する巨大軍港と、その管理防衛部局たる鎮守府を擁する海軍の街で、横須賀、佐世保とともに海軍三大拠点のひとつとされている。

呉鎮守府の敷地内には、鎮守府本部、港湾防衛隊、海兵団本部、水交社など、様々な関連施設がひしめいており、経理学校、砲術学校、機関学校といった各科の教育機関もここに軒を連ねていた。早苗はそれらのうち、魔女つ子専用の教育施設である海軍特殊軍属養成所において、軍属としての基礎的なレクチャーを受け、この日の午前中までに全プログラムを修了していた。

午後。早苗は、研修官から鎮守府本部へ赴くよう指示され、徒歩にて本部建物へと向かった。その目的地までさしかかるや、道端で見知らぬ将校に呼びとめられ、いきなり辞令と階級章を手渡されたのである。

いわく、五月二十二日付をもって、神楽早苗を海軍大佐待遇軍属に任じ、魔法戦艦いずみへの艦長着任を命ず——と、ある。

辞令書には海軍軍令部長、新房清和大将の署名がなされており、それを携えてきた将校自身も軍令部付の参謀であるという。むろん、早苗は仰天し、その驚きのあまり、つい、こう抗弁してしまった。

「だって、艦長ですよ？ いきなり大佐ですよ？ あたしつい先週まで民間人ですよ？ こんな務まるわけじゃないじゃないですか」

「……ま、落ち着いてください」

大尉の襟章をつけた将校は、気難しげな顔つきで早苗の言葉を制した。

「小官は、たんなる連絡役で、質問や抗議にはお答えできんです。本来、このような形で辞令をお渡しするなど、軍令部としても不本意なのですが、なにぶん緊急を要する状況でして……詳しい事情は、いずみへ乗艦後、関係者へ直接お訊ねください。予定では今夕一六〇〇、いずみから、こちらへお迎えが来るはずです」

言うだけ言うと、将校は敬礼をほどこし、足早に立ち去っていった。

「え、あ……ちょっと、待って」

あまりな事態に、早苗はしばし呆然、言葉も出なかった。

やがて我に返り、手許を見れば、渡された階級章は確かに軍属大佐を示し、辞令が正式なものであることも間違いない。

とはいえ、なぜ自分が——当然、この疑念は湧き上がってくる。

（いくらなんでも、ありえない……）

ひとり悩む早苗へ、背後から声をかける者があつた。

「少し、よろしいか？」

あわてて振り向くと、長身健躯、見るも雄偉な軍服姿の一青年が早苗を見おろしている。

眼光はぎらぎらと鋭く、ひきしまった顔つきは精悍そのもの。肩幅広く、威風あたりを払って姿勢堂々たるものあり、ただ惜しむらくは、軍服の着こなしが少々だらしない。総じて見れば、どこか時代遅れな無頼漢というような風采である。

「鎮守府本部というのは、ここでよいのかね？」

その声は、おだやかだが、腹に深々と響く重みがあつた。

「あ——はい、そうです」

早苗が、戸惑いつつ応えると、青年は、目もとの陰をやわらげ、

かすかに笑った。

「そうか、ありがとう。ようやく辿りつけた……」
どうも道に迷っていたらしい。

「ときに、きみは民間の人かね」

そう尋ねたのは、早苗が私服姿で、それを珍しいと感じたものだろう。

日本軍においては、陸海とも、魔女っ子には軍服、拳銃、軍刀などの装備は支給されず、それらの着用・佩用義務もない。ただ階級章だけは、勤務中に限り、任意の服装の任意の場所へつける慣わしになっていた。海軍の魔女っ子の階級章にはビーコンが内蔵されており、実戦時には持ち主の位置情報を母艦や所属基地に発振する機能を備えている。

「ええと、軍属です、一応」

「ほう……では仕事でだったのかな。呼び止めて悪かった。頑張ってくれたまえ」

青年は、軽い会釈を残し、大股に本部建物へと歩き去っていった。早苗は、その背中を見送りつつ――青年が、あきらかに幹部将校らしきこと、その将校に敬礼するのを忘れていたこと、など、ふと思い当たり、急に耳朶を熱くして、肩をすくめた。

（あー……やつちゃった……研修で、あれほどいわれたのにな……）
日本海軍の敬礼は、着帽時は拳手敬礼、無帽時は腰を曲げてお辞儀するというのが、旧来からの慣例となっている。

早苗は正規軍人でなく軍属なので、敬礼は義務ではないが、そこは最低限の礼儀として、目上に対しては、お辞儀くらいはしておいたほうがよい、と教わっていたのである。

相手が気にとめず早々に立ち去ってくれたからよかったが、これが直属の上官でもあれば、おそらく、あまりよい顔はされなかったであろう。

（やっぱり、何かの間違いよねえ。こんなあたしが、大佐で艦長なんて）

と、小首をかしげたところへ、横あいから、新たな靴音がきこえてきた。

早苗がそちらへ視線を寄こすと、純白の軍装をまとった年若い女性将校が、早苗のもとへ歩み寄ってくる。

小柄で、腰は細く、ずいぶん華奢な体つきと見えるが、白い海軍帽からショートの黒髪を風に流しつつ、双眸は凜と前を見据え、唇をきゅつと結び、足どりは胡蝶のごとく軽やかに、颯爽、可憐、花も羞らうばかりである。

早苗は、呆然と見とれた——同じ女でありながら、自分と、こうも違うものかと、つい妙な感心を抱いたものである。

女性将校は、つと足を止め、踵を鳴らして両足を揃え、見事な拳手敬礼をほどこした。白い頬に薄朱がさして、わずかに上気しているようにも見える。

「小官は、連合艦隊参謀、有田聡子少佐です。神楽早苗大佐なのでいらっしやいますね？」

「え、あ——はい」

大佐どの——などと突然呼ばわれて早苗は内心戸惑ったが、しかし先の失敗は繰り返さじと、慌てて答礼がわりにお辞儀をした。

それを静かに見届けてから、有田少佐なる女性は、仰々しい口調で告げた。

「小官はこのたび、連合艦隊総司令部より、魔法戦艦いずみ副長の任を拝命いたしました。不束者ながら、誠心誠意、この大任に全力を尽くす所存であります。どうぞ、宜しくお願いいたします」

「は、はあ……」

「つきましては、すでに、いずみは湾内に遊弋して、我々の乗艦を待ちうけているとのこと。車と大発を用意してありますので、どうぞ、こちらへ」

「え、まだそんな時間じゃ……さっき一六〇〇って」

「申し訳ありません。現在、すべての予定が繰り上がっております」

「ちょ、ちよつと待つて」

早苗は、先刻来の疑念を、この有田少佐なる女性にぶつけてみた。
「あたし、先週、ここに来たばかりなんだけど。いきなり艦長とか、何かの間違いとしか」

「ええ。その件は、こちらでも承っております。間違いではありませんよ」

おそらく、早苗が質問してくることは、あらかじめ想定済みなのだろう。有田少佐は微笑を浮かべて、なだめるように言った。年の頃は二十三、四、というところ。生真面目そうな顔つきが、そうほころぶと一転、じつにつややかで潤った表情になる。

「突然のことで、驚かれるのもご無理はありません。ですがご安心ください。小官が連合艦隊総司令部にてお伺いしたところでは、大佐どのには、着任後、ただ艦長席についておられればそれでよく、海軍および連合艦隊は、それ以上の何かを大佐どのに求めることはない、ということでした」

「……は？」

「また、区々たる軍務などは、可能な限り、小官はじめ艦内スタッフが適切に処理し、大佐どのにご負担をおかけせぬよう、全力をもつて補佐せよと——そうも仰せつかっております」

早苗は、まばたきしながら、有田少佐の顔を見つめた。

「えー……と、あの、要するに？」

「要するに。とくに仕事はありませんので、ただ座っておられるだけでよいですよ、ということですよ」

「そ、そういうのって、ありなの？」

「はい」

きっぱりと、迷いなく、有田少佐は答えた。

「ですから、どうぞ細かいことはお気になさらず、どっしりと構えていてください」

「……は、はあ」

早苗は、急に肩から力が抜けていくのを感じた。

研修を終え、これからいかなる激務が待ちうけているものかと、身構えていたところである。

まさか、仕事はないので座っている、などと命じられるとは。脱力感のなかで、早苗は内心、あれこれ推測してみた。

海軍にしてみれば、ケース四二七という物珍しさにつられてスカウトしたものの、重要な仕事を任せるわけにもいかず、といって部署を与えないわけにもいかず、扱いに困っていたのではないかな――（それで、とりあえず、お飾り……とか。そういう感じになったのかな……）

有田少佐が、不思議そうな面持ちで早苗の顔を見つめている。

「あの、大佐どの？」

早苗は慌てて顔をあげ、気の抜けた声で応えた。

「あー……いや、なんでも。あはは。わかりました。うん」

力ない笑みを浮かべ、早苗はうなずいた。

「納得していただけましたか？ では早速、車のほうへ参りましょう」

早苗の内心を知ってか知らずか、有田少佐はやけに元気一杯、颯爽たる足どりで、早苗の先にたって歩きはじめた。

早苗は、少々肩を落としてつつ、悄然、そのあとへついてゆくのだった。

通天閣、地下二階。

ラボ勤務者専用喫茶スペース「チャッピー」カウンター席。

白衣姿の男女が、並んで席につき、静かにセイロントーのカップを傾けている。

店内に他の客の姿はなく、天井備えつけのスピーカーからは「月光」の調べが延々と流れ続けていた。

「……忙中閑あり、ね」

ため息とともに、ぼそりと呟いたのは、白衣姿のかたわれ、人材

資源情報部長の肥田妙子女史である。

「たんに仕事放り出して逃げてきただけですけど」

と、こちらは分析担当主任、井上和人。

「じゃ、忙裏閑を偷む……」

「どつちでもいいですよ」

苦笑しつつ、井上主任は、空になったカップを受皿に戻した。

「で、聞きましたか、例の」

「ん？ なにを」

肥田部長が小首をかしげるのへ、井上主任は、胸ポケットから紙を取り出し、「これですよ」と示してみせた。

それは、海軍軍令部の書類のコピーである。

「あなた、どこでそんなもの……あ、この人」

「ええ、あのケース四二七該当者です。なかなか大変なことになってるようで」

「……はー。ずいぶん思いきった人事ね」

「ええ。軍令部も連合艦隊も、今回、この人事を実現させるのに、相当な無茶をやらかしたとか」

「相手が相手だもの。ぞんざいには扱えないってことね」

肥田部長は、薄い笑みを浮かべながら、ティーカップを軽く爪ではじいた。チン、と澄んだ音が響く。

「とはいえ、こういう配置にした以上、少しは役に立ってもらわないと、税金の無駄遣い、つてことになるわよね」

「どう役立てるか、そこが肝心なところですけどね。あの人の能力というのは、実戦とは、そう関わりのあるものじゃありませんし。

ま、だいたい推測はつきますが」

「あの能力は、当人にとっては諸刃の剣よ。そりゃ、子供たちには好かれるでしょうけど。あんまり負担かけると、すぐパンクして辞めちゃうわよ、あの人」

「でしょうね……適性分析の結果を見ても、軍や国家への忠誠意識、帰属意識には乏しい人のようですし、さらに社会経験が少ないので、

忍耐力という点でも懸念があります」

「なんせ、魔法の家事手伝い、だもの。そのまんまじゃないの」

「そういえば海軍って、時々、妙なネーミングしますよね。魔法の喧嘩番長、とか、魔法の辻斬り、とか。ああいうコードネームって、誰が名付けてるんでしょうかね」

「なんか、海軍省の人事局に、それ専門の部署があるらしいわよ。

そんなところにもわざわざ職員置いて給料払ってるってんだから、馬鹿みたいな話よね。税金の無駄遣いじゃないの」

「なんとも、楽そうなお仕事ですな。羨ましい限りで」

笑って井上主任が言うと、肥田部長は深い溜息で応えた。

「はあ。そうよねえ。そんな仕事なら、残業とかもなさそうだし、ほんと羨ましい……。こちらら、これからまた仕事に戻んなきゃならないってのに」

「ええ。今日はあと十人分くらい、分析と決裁が残ってますからね。また残業確定ですよ」

「もう徹夜は嫌よー……はあ」

慨嘆一声、肥田部長は、がつくりとうなだれた。

魔法戦艦いずみは、すでにドックを出て湾内に遊弋中という。

早苗は、有田少佐とともに護岸から小型発動機艇へ乗り込み、いずみの舷側へむけて航走していた。

——日は暮れかかっている。

紫雲西空に散って、星は銀の小粒のごとく。水面すでに晦く、ただ揺らめく波に、夕陽の余光がてらてらと映えるばかり。

「申し訳ありません、すっかりお待たせしてしまいました……」

有田少佐が、ハンドルをさばきつつ、すまなそうに言う。

「仕方ないよ、エンジントラブルじゃ。でもこれ、ずいぶん年季の入ったボートよね……。……揺れるし」

「本来なら、もっと大きな舟艇がありまして、そちらへ乗っていた

だく予定だったんですが。その大発に、たまたま空気がなくて……
本当に申し訳ありません」

「そんなに謝らなくていいって。けっこう楽しいよ、これ」

「そう言っていたけると、助かります」

「しかし……アレよね、なんていうか……」

前方をふり仰ぐと、薄暮の空の下、威容傲然、城郭のごとき巨艦が、その背に白燈赤燈の光彩点々と添えて、水上静かに横たわっている。

早苗は歎息を洩らした。

「ただもう、すごい、としか言いようがないわね、こつも大きいと」

「大きいだけではありませんよ」

有田少佐は誇らしげに語る。

「最新のエンジン、最高の設備、最強の火力、鉄壁の防御力。いま世界中を探しても、これだけの性能を擁する戦艦は、他にありません。これが……」

そこまで言つて、ふと、有田少佐は、早苗に微笑をむけた。

「大佐どの。あなたの、船なんですよ」

「あ……あたしの？」

早苗はあらためて、いまや眼前に迫りつつある魔法戦艦いずみの姿を、目を凝らして見つめた。

「そつか……。これ。あたしの船なんだ」

このとき、艦の中央部に煌く信号灯のひとつが、みじかく瞬いた。おそらく早苗らの接近を知って、受け入れ準備をと、艦内で指図でもあったのだろう。

ただ早苗には——戦艦が、挨拶のウィンクひとつ、投げてよこしたようにも見えた。

——これから、よろしく。

そう語りかけてきた気がした。

（こちらこそ——）

声には出さず、早苗は、そつと心の中でささやいてみるのだった。

第二話「魔法の艦長」

五月二十二日、十八時二十分。

魔法戦艦いずみは、艦長神楽早苗軍属大佐、副長有田聡子少佐の両名を迎え入れ、呉軍港より進発。一週間の試験航海の途についた。本来の慣例なら、新造戦艦の処女航海に際しては、海軍や政府の要人も列席し、大がかりな式典が執り行われるものだが、今度に限っては、艦装を済ませ、物資を積み終えるやドックを出て、接岸も投錨もせず、湾内で艦長と副長の到着を待ちつけ、二人を収容するや即、逃げるように進発と、何にせよあわただしい船出であった。

この試験航海の目的は、巡航時の各種データの取得、全速試験、乗組員の育成訓練、戦闘演習など多岐に渡っている。

「連合艦隊からは、一刻も早い戦力化をと、矢のような催促でして……戦局も、あまりよくありませんから」

出航を急いだ理由について、有田少佐はそうのように語るのだった。「それは、あたしにも理解できるけど」

早苗は、艦橋中央の艦長席に座し、傍らに立つ有田少佐へ、少々不満そうな顔を向けた。

「そういうことだったら、人手が必要でしょ。あたしも何か仕事やっただろうがいんじゃない？」

「艦長どのお仕事は、そこへ座っておられることです」

「……むう」

にべもない対応に、早苗は頬をふくらませた。

五月二十六日早朝——試験航海出発から四日目のことである。

位置は豊後水道を南へ抜けたあたり。予定では、午前うちに艦内演習を実施、午後には全速試験を行うことになっている。——が、これら艦内におけるあらゆる行動指揮権は、もっぱら副長たる有田少佐が執行し、早苗はただ艦長席から見物しているだけであった。

早苗は軍属として必要最低限の知識は初期の研修で教え込まれた

が、幹部将校としてはいまだ何らの知識も与えられていない。むしろ実務など到底こなせるはずもなく、結局、何事につけ他人に代行してもらえない状況だった。これはなかなかの苦痛で——針の蓆、といってよい。

早苗が起居している艦長室は、床に赤絨毯、天蓋つきベッドに、船窓には絹のカーテン、壁にはいかにも高価そうな油絵、天井には黄金色のシャンデリアと、贅をつくした内装に覆われており、食事と会議に使用する士官室も、貴族サロンでもあるような大理石の壁、黒檀の大卓、燦爛たるシャンデリアに彩られている。

こういう贅沢な環境が整っているうえに、連合艦隊総司令部からは、——区々たる軍務など、艦内スタッフで可能な限り処理し、艦長に負担をかけぬよう——と、有田少佐はじめ乗組員総勢五十名ごとごとく厳命をうけているため、身の世話まで至れりつくせり、仕事といえば艦長席に黙って座っているだけ——という日課であった。

早苗にしてみれば、どうにも分不相応な待遇を受けているようで落ち着かないし、忙しそうに立ち働く艦橋要員の姿など見るにつけ、申し訳ない気分にもさせられるし、なにより、なすべきことが一切ないので、退屈きわまりない。

この状況に追い討ちをかけるように早苗を苛立たせたのは、食事の味気なさである。

いずみは運用システムの大半が高度に自動化され、そう人手を必要としない構造になっている。かつて、このクラスの戦艦を運用するには二千名からの乗員を必要としたものだが、いずみの最大乗員数はわずか百五十名、しかも現在は試験航海の段階ゆえ、まだ五十人が乗り込んでいるに過ぎない。

それら乗員へ供される食事は、すべて自動調理システムでまかなわれていた。一般兵員と幹部将校とでメニューに違いはあるが、いずれも機械調理で、味覚的な工夫などはあまり考慮されていない。

「そりゃ、見ためは豪華だし、栄養も量も申しぶんないと思うけど、

どうもね……」

その日、艦内演習終了後の昼食時。

この四日というもの、あえて黙って耐えてきた早苗も、とうとう音をあげて、こう不満をあらわにした。

「いくらなんでも、これはさ……呉で研修受けてたときのほうが、よっぽどおいしいゴハン出てたよ」

このとき、士官室へ食事に来ていた将校は、総勢十名ほど。機関長、砲術長、軍医長など、各部署の長が会席するなかでの発言である。

「それは言わないお約束です」

隣席の有田少佐が困り顔に応じた。

「配膳はともかく、調理は極力、人手を介さないシステムですから、こまかい味付けまでゆき届かないのは、どうにも致しかたありません」

「材料のほうは、結構いいものを仕入れとるんですがね」

主計長を務める草川主計少佐が横あいから口を挟んだ。定年間際のベテラン軍人で、経理、被服、烹炊など、艦内における主計科の仕事を統括する立場の人物である。

「ワシらはまあ、こういうのにも慣れとりますが。お若い艦長どのには、やはり味気ないでしょうな、この機械調理というやつは」

「確かに正直、おいしくないです……」

主計長の言に、早苗は素直にうなずいていた。

「でも材料がしっかりしてるのなら、ようするに、誰かがお料理すれば、もっとちゃんとした味になるわけよね。……誰かが」

ふと、早苗は有田少佐へ顔を向けた。

「少佐？」

「はい、なんででしょう」

「……あの、さ」

早苗は、少し遠慮がちにたずねた

「調理システムとは別にさ、この艦、ちゃんとしたキッチンって、

あるのかな」

「烹炊所のことですか？」

「そう、それぞれ」

「確かにあるにはありますが……当艦ではまだ、必要もないので、封鎖されたままですね。何らかのトラブルで自動調理システムが使えない場合の非常用ですので」

「……使わせて」

「はい？」

小首をかしげる有田少佐へ、早苗は真剣そのものの眼差しと口調で、一気にたたみかけた。

「今後、士官食は全部、あたしが作るから。その烹炊所、使わせてほしいの」

決然たる表情で懇願する早苗に、有田少佐は、とんでもない、という顔をしてみせた。

「艦長どのにそんなご負担をおかけするわけには。どうしてもということでしたら、誰か手の空いてる者に命じて、つくらせるようにしますから……」

「手が空いてる人なんて、どこにもいないじゃない。ギリギリでやつてるんでしょ、この艦」

「は、はい、しかし」

「でもあたしなら暇だよ。なんせ何もやることないんだから。午後の全速試験だって、どうせただ座ってるだけでしょ。だったら、その間に、お料理くらい、いくらでも作れるから。毎日だって、十人分や二十人分くらい、楽勝よ」

ここぞと、早苗は勢いよく詰め寄った。有田少佐は、そのあまりな剣幕に二の句を継げなくなってしまう。

「味は保証する。自信あるんだから」

早苗がいったん言葉を切ると、士官室全体を、短い沈黙が覆った。居並ぶ将校らの誰も、早苗と有田少佐のやりとりに割って入ろうとはせず、ただ静かに視線を注いでいる。

早苗は、周囲を眺め渡してから、あらためて、皆へ向かって述べた。

「——あたしの魔法は、こういう事のために使うものなんです。ひとつ、任せてみて下さい」

この一言が決定打となった。

有田少佐は、微笑とともにうなずき、おだやかに告げた。

「承知しました。でもあまり、ご無理をなさいませんように」

早苗の顔に、ぱつと喜色がひろがった。

無聊数日、ようやく何かしら、やるべき仕事できた——そういう歓びであつた。「お飾り」として、ただ座っているよりは、動いているほうがよほど気楽だと思えた。それが自分の得意分野なら、なおさらのこと。

「じゃ、さつそく、今夜のぶんから、あたしが作るから。……で、少佐、その烹炊所つてどこに？」

「ワシが案内しましょう」

草川主計長が、椅子を引いて立ち上がった

「それと、うちの科員に、器材と材料を運ばせましょう。補助の人手は必要ですか？」

「いえ、調理はひとりで大丈夫です。荷物のほうは、お願いします」
「では手配しときましょう」

草川主計長がうなずくと、早苗は俄然、張り切った様子で、「エプロン持つてくるから！」と言い残し、士官室から駆け去っていった。

慌しい靴音が、次第に遠ざかつてゆく。それまでただ黙して見守っていた砲術長の首藤少佐が、ふと呟いた。

「……仕事をさせないことで、かえって本人には負担をかけておつたようだな。難しいものだ」

一同、つい苦笑をかわしあつた。

いずみの建造以来はじめて、烹炊所に灯りが点った。

内部は早苗の想像以上に広々とした空間で、必要な設備も充実している。

草川主計長の指図で器材と食材が運び込まれ、ガスも通じるようになる。早苗は主計科員らを追い出して、ひとり、清潔な床に両足を張り、愛用のエプロンをかけ、慣れた手つきで腰紐をゆわえた。

——薄い桜色した、魔法のエプロン。

もともとは、小学六年生の頃、母親の瑠衣が買い与えてくれたものだった。見ためには変わったところはなく、特徴といっても、ちよつとしたフリル飾りが付いている程度。それで当時、早苗はひそかに、このエプロンに「フリフリ」という名を付けた。

そのときからである。不思議な魔法が早苗に備わったのは。

「フリフリ」を身につけたとき、早苗の意識には、古今東西の様々なレシピ、時宜にかなった献立が自然なイメージとなって湧きだし、あらゆる調理器具も加減自在、意のまま操れるようになる。

これが早苗を魔女つ子たらしめる力——魔法料理であった。

（いくよ、フリフリ）

心で呼びかけ、唇には、秘密の呪文。

桜色のエプロンが、忽然、真珠のごとき光沢を帯び、淡い輝きを放ち始める。

「さてと……まずは、アレか。ここなら広いから、手加減なし、全力でやれるね」

右手に包丁を握り、念を集める——。

手始めに製作するのは、アイリッシュ・シチューを原型とする伝統の海軍料理、肉じゃがである。

早苗がおもむろに包丁を振り上げると、麻袋に収まっていた大量のジャガイモ、そのうちおよそ一キログラムぶんが、ひとりでに、次々、宙へ舞い上がった。

「やつ！」

と、包丁を振り回せば、軌跡が光の螺旋を描き、刃はたちまち風

を呼び、空気は見えざる渦を巻いて宙なるイモの群れを撃ち、皮をはぎとり芽を除き、割って、切って、角をとり——瞬く間に、乱切りに整形されたジャガイモが、水を張った鉄製のボウルへと、ばらばら落ち込んでいくのだった。

そうするうちにも、もう人参、玉葱、糸蒟蒻、などの具材も空中へ浮かんでいるし、いつの間にか大鍋は火にかけられ、じわじわ油煙を噴きはじめている。

そこへ牛肉の一塊が、次はおのれの番といわんばかり、ふわりと漂ってくる。早苗が、それっ、と包丁を突き出すと、輝く白光の輪舞が肉を裂き、スライス、こま切り、三センチ——あえなく切り分けられ、ことごとく大鍋の油煙へ、続々放り込まれてゆく。

早苗は別の鍋に火をかけ、昆布と鰹のだし汁をとりつつ、さらに宙へ向け刃を振るい、玉葱を櫛切りに、人参は乱切りとして、軽く刃を入れた糸蒟蒻ともども、次々、大鍋へ叩き込んでいった。

食材が油に馴染んだ頃合、大鍋にだし汁を加え、アクを取りつつ煮立ててゆく——はや次なる料理の食材を準備しつつ、火力を弱めて砂糖とみりんを加え、落とし蓋して、五分。

使い終えた器材を洗い、十数匹もの鰻をさばきながら、大鍋には醤油を加え、さらに煮込んで——グリーンピースをぱらりと散りばめ、ひと煮たち。

こうして肉じゃがが完成したとき、すでに別の鍋には満々と油がたたえられ、脇には衣を帯びた鰻の切り身が山と積まれている。

「さッ、次は揚げ物」

肉じゃがの出来ばえは上々——。早苗は、心身とも充実という顔して、楽しみに、新たな作業へとりかかった。

包丁をひとつ振るたび、箸を繰るたび、ヘラを返すたび、かならず虹の光彩があふれ、あらゆる食材は指揮者のタクトに従うように、様々な和音を奏でつつ確実に調理されてゆく。

器材は鳥雲のごとく飛び交い、風が舞い火焰が踊り、作業台にはたちまち無数の皿が並んで、暖かげな湯気、芳香をたちのぼらせる

のだった。

この日、士官室の大卓にのぼった献立は。

肉じゃが、白身魚のフライ、ホウレン草と小魚の和え物、キャベツとコンソメのスープ、昆布とトマトのサラダ。他に、人参を使ったカップケーキなど――。

早苗の包丁さばきはとどまるところ知らず、結局、士官食のみならず、全乗組員にゆきわたって、なお余るほどの分量を、半時間という迅速さで完成させている。

それらは主計科の人手を用いて、ただちに士官室と科員食堂へ運ばせ、両者分け隔てないメニューを配膳させた。

通常、軍艦の食事というのは、豪勢なかわり毎回実費を要する士官食と、セルフサービスの無料配給となる一般兵食とがあつて、両者では当然食事の質は変わるし、メニューもずいぶん違ったものになるのが慣例だが、早苗は、この壁を一気に取り払って、皆に同等の食事をと、腕によりをかけたのである。

「全艦、同じ食事を」

そう艦長として命じられれば、誰も、否とはいえない。

夕刻。士官室に集った人々は、まず出揃った料理の見た目が意外に素朴なことに驚いた。総じて家庭料理であり、山海の美味薫醸を並べたような贅沢なものではない。

席につき、それらを実際に食すや、たちまち、そこかしこから感嘆の吐息があふれ、続いて早苗への賞賛の声があがった。

「大したもんだ。肉じゃがというのが、こんな旨いもんだとは、ついぞ知らなんだ」

と、草川主計長が絶賛すれば、有田少佐も、白身魚のフライを頬張りながら、いまにも感涙こぼさんばかり、しみじみ述べる。

「こんな美味しいフライ、初めてです。なんというか……。幸せって、こういうことなのでしょうか」

機関長の大庭少佐、砲術長の首藤少佐らの古兵らも、「旨い、旨い」と夢中のように語るし、軍医長の芦田少佐などは、「うちのみさんも、これくらい上手けりや……」と、つい、こぼすような始末であつた。

「よかつた、みんな喜んでくれて」

早苗も得意顔である。

「今後、希望のメニューとかありましたら、いつでも聞かせてください。材料さえあれば、なんだって作れますよ」

こつ高らかに宣言するのへ、有田少佐が、少々気遣わしげに早苗を見る。

「今後……ですか。我々にしてみれば有難いお話ですが、この試験航海後、わが艦は正式配備となり、配属乗員数は、いまの三倍に膨れあがることになります。その全員分ともなりますと……」

「なに言つてんの、全然余裕よ」

早苗は強気な笑みを浮かべる。

「今日だって、これ、三十分もかかってないんだから。一日三食、百五十人分としても――ま、たいしたことないわね」

「しかし、本当に、それでよろしいのですか？ 補充人員が来れば、そこから人手を割いて烹炊作業にあてることもできますが」

有田少佐の言葉に、早苗は笑つて首を振つた。

「あたし、他に取柄がないからね。艦長の仕事は、だいたい、少佐が代行してくれてるでしょ？ だったら、あたしは、あたしにしかできない仕事がしたいのよ。今日、やってみて、はつきりわかつた。これがあたしの仕事だって」

力強く言いきる。

早苗は、もう覚悟を決めきつていて、その表情にも、一片の迷いも逡巡もないようだった。

有田少佐は静かにうなずいた。

「そこまでおっしゃるなら……。わかりました。ですが、せめて烹炊作業がない時間帯は、艦橋にいて下さいね」

「や、やっぱり、そういうときは、ちゃんと座ってないとダメ？」

「むろんです。そちらが本業ですから」

「むう、あれ退屈……」

早苗は、子供っぽく口をとがらせてみせ、将校一同の笑いを誘った。

深夜。

柱島泊地に繋留中の連合艦隊旗艦、揚陸指揮艦「しなの」艦橋。

連合艦隊の枢要をなす幹部らが居並ぶなか、電信官が歩み寄ってきて告げた。

「いずみより定時報告です。現在まで、すべて問題なし、と」

「……そうか」

連合艦隊司令長官、小沢政三郎大將は、短くうなずいた。

「どうやら順調にいつておるようだな。あの素人艦長が何か我俣でも言っておりやせんかと、少々心配しておったが」

「なにせ、ここ何年も、自宅にひきこもっていたそうですからな」

と、先任参謀の出崎少将が応じる。

「それだけに、扱いは慎重にと、乗員らへ指示してあります。すぐ辞められたりしては、たまりませんので」

「うむ。で、今後のことだが」

「段取りは、ほぼ済んでおります。塚口少将は、すでに呉鎮守府へ到着し、手続き中です。他の人員も、あらかた呉へ向かっております」

「そうか。ところで……彼女は、本当にあのままにしておいてよいものかね。これからでも、いずみへ教官なりと派遣し、最低限の幹部教育だけでも施してやるべきじゃないかね」

「そのために、有田少佐がついているのです。なにせ海兵次席の秀才ですからな。任せておいて、まず問題ないでしょう」

「……そうか、あの子がついておったな。ただ、なにせ若い……ち

と不安ではあるが」

海軍の幹部教育機関としては、海軍兵学校と海軍大学校がある。兵学校はいわゆる士官学校に相当し、これを卒業して任官後、一定以上の勤務実績を上官に認められた優秀な士官にのみ、海軍大学校への受験資格が与えられる。これに合格して海大入学をはたし、なおかつ優秀な成績で卒業することが、キャリア軍人の必須条件であった。有田少佐も、そういう難関をくぐり抜けてきた若手キャリアの一人である。

「晴嵐の発動まで、あとわずか……」

小沢長官は、複雑な面持ちで、両手を腰に回し、ゆっくり窓外を振り仰いだ。

「戦力は揃いつつある。なんとしても、勝ってもらわねばな」

魔法戦艦いずみは、一週間の試験航海を終えて呉へ帰還した。

しかし休む暇はなく、連合艦隊司令部から、待っていたとばかり新たな辞令が届いている。

要約すると。――魔法戦艦いずみは、六月一日付をもって連合艦隊に正規配備となり、新設の第七魔法戦隊へ編入、同戦隊旗艦と定む。戦隊司令部の設置運用すべく、すみやかに要員受け入れ準備せよ――と。

いずみは帰還後ただちにドックへ入り、主機関や艤装の点検を受けた。この間に、補充の人員やら物資やら続々と集結しだして、手続き、確認、搬入、乗り込み、報告、行きかう人々の足音、ざわめき、クレーンやコンベヤの機械音など、たちまち艦内外とも喧騒雑然、慌しい空気をみなぎらせはじめた。

早苗も艦橋にあつて種々の決裁に追われており、有田少佐に手伝ってもらいながら、書類の束にペンを振るっていたが、そこへ係官が駆けつけて報告した。

「塚口少将が到着なさいました」

「あれ、もうそんな時間？」

早苗は、きょとんと顔をあげた。

「戦隊司令の人よね。まだ約束の時間には随分早いような……」

呟くうちに、見るから雄偉な一将校が、靴音高く艦橋へ踏み込んできた。

戦隊司令といえば、本来ならタラップで出迎えねばならない相手である。早苗はあわてて席を離れ、腰を折って上半身を前傾させる海軍式敬礼をほどこした。

「……ご苦労」

短く答礼する将校の声に聞き覚えがある。早苗が姿勢を戻して顔を上げると、やはり見覚えのある姿がそこに立っていた。

「あ、鎮守府で……」

早苗は動揺気味に口走った。刃を太陽にかざしたような、きらきらした厳しい眼光と、無愛想だが精悍な顔つき。広く逞しい肩。そして相変わらず、軍服の着こなしは少々だらしない。

「奇遇だな」

と、青年将校は眉ひとつ動かさず答えた。

目と目が合う。

年の頃は、早苗と同じか、それよりやや上くらいだろう。一見、青年の双眸はただ厳しく険しいばかりだが、早苗は、その奥深いところに、どこか穏やかな、温もりを感じさせる何かを見ていた。

——悪い人ではない。

確たる理由はないが、早苗はそう直感した。

「お、お出迎えもせずに、そ、その、失礼、しました。わたしは、神楽早苗軍属大佐、当艦の艦長です」

つい、口調がたどたどしくなる。

耳朶が熱い。

先日、この人物への敬礼を忘れてしまったことなど思い出して、早苗は無性に恥ずかしい気分になっていた。

「塚口修一だ。先日、少将になった……ここで、第七魔法戦隊の指

揮をとることになる。以後よろしく頼む」

素っ気ない口調で言う。

声には、相変わらず独特の重みがあった。

「こ、こちらこそ」

早苗は、いまや耳全体を真っ赤にして、短く応えた。

有田少佐が自己紹介を行う間、早苗は、なんとなく下を向いて、戸惑い気味に自問自答していた。

（お、おかしいなあ、……なんであたし、こんな恥ずかしがってるんだろ）

「艦長どの？」

有田少佐が、不思議そうに早苗の顔をのぞき込む。

早苗はあわてて顔をあげた。

「あ、ご、ごめんなさい。……ええと、塚口、少将——閣下、その、連合艦隊からは、何か」

「閣下は不要だ。そうだな。提督、でいい」

「はい？」

小首をかしげる早苗に、有田少佐がフォローを入れる。

「提督とは、艦隊指揮官に付される称号です」

「え、あ、そうなんだ。では、……提督」

「ああ。連合艦隊からは、我々がこの艦に乗り込んだ時点をもって、第七魔法戦隊の発足とみなし、積み込み作業が終わり次第、すべての予定を繰り上げ、戦隊司令の指揮下にて作戦行動へ入るように……そう指図を受けている」

「質問、よろしいでしょうか」

有田少佐が尋ねる。

「第七魔法戦隊とは、魔法艦隊所属の新設部隊と推測しますが、当方にはいまだ、なんらの説明も来ておりません。よろしければ、命令系統の帰属や、所属艦艇の内訳など、詳しくお聞かせ願えませんかでしょうか」

「この艦だけだ」

「は？」

「第七魔法戦隊の所属艦艇は、この戦艦いずみのみ、と聞いている」
有田少佐は、軽くまばたきした。

「それは……、いずみ単独で、一個戦隊を編成する、ということですか」

「そうだ」

塚口「提督」は、無愛想にうなずき、淡々と語る。

「今後当面の間、戦艦いずみは、単独で、ある作戦行動に従事する。それにともない、艦の指揮とは別に、独立した作戦指揮系統を置き、第七魔法戦隊という部隊名を新たに割り振ることになった。形式上は魔法艦隊の所属だが、実際の指揮系統は連合艦隊司令部の直属となる。いわゆる独立部隊というやつだ」

「独立部隊……ですか。なるほど、その点は諒解しました。では今後、わが艦が従事するという、ある作戦行動とは、こういった内容なのでしょう」

「……それよりも」

塚口提督は、不意に話をさえぎった。

「どうやら、先ほどから、次の来客がお待ちかねのようだ。作戦の話は、あとにしよう」

言いつつ、背後の艦橋出入口へ向け、肩こしに呼ばれる。

「いつまでも隠れてないで、出てきたらどうかね」

ややあつて、複数の小さな人影が、出入口の陰から、ぞろぞろ姿を現した。

「なんだ……ばれてたみたい」

「ちえー」

「あーあ、ビックリさせてあげよーって、思ってたのにー」

ため息まじりに、めいめい呟く声は、落胆しているようにも、少々ばつが悪いというようにも聞こえる。

共通なのは、ちょっと照れているような、はにかみを含む、幼い顔つき。

服装は、ジャンパースカートやサンドレス、ブラウスにキュロットなどと各人まちまちであるが、皆それなりにおめかししている様子である。

一団、互いにうなずきあい、しめしあつて、艦橋内へ駆け込んできたかと思うと、早苗たちの前へ整列し、一斉に、敬礼がわりのお辞儀を試みせた。

いずれも十歳前後の少女らと見え、その胸もとには、軍属の証たる階級章。今後、戦艦いずみの所属となるべき、小さな魔女っ子たちであつた。

「よろしくおねがいしまーす！」

声を揃えて、元気よく挨拶する。

「ええ、よ、よろしく」

早苗は、なにか、気圧されたような顔つきして応えた。

「いつから、あそこにいたの？ 全然気付かなかつた……」

「えへへ、でしょ、でしょ？ みんなで、艦長さんをビックリさせてあげようって思つて、こっそりかくれてたんだよー」

小柄で、少しくせつ毛の少女が、ほがらかに言う。すると、その隣りに立つ、やや年長と見える娘が「こら、失礼でしょ」と、たしなめた。

「それにしても、早かつたのね。到着は夕方くらいって聞いてたけど」

早苗がそう訊ねるのへ、年長の少女が丁寧な口調で応じた。

「はい、その予定でしたが、連合艦隊のほうから、急ぐように連絡がありました……」

そこへ、有田少佐が質問を投げかける。

「到着予定は五名と聞いていましたが、ひとり足りないようですね？」

「それは――」

誰かが答えようとしたとき、けたたましい靴音が響き、あらたな人影が、勢いよく艦橋へ闖入してきた。

その姿を視界に認めるや、早苗は、不意に銃声をきいた鴨のごとく慌てふためいた。

「ばーんっ！」

かけ声も高らかに、整列する少女らの間をすり抜け、満面、はじけるような笑顔とともに、早苗の胸めがけて、飛び込んできたのは――。

「み、美佳ちゃんっ？」

「えへへ、ちよつと遅れちゃった」

魔法の熾天使ミカ、すなわち池上美佳、その人であった。

海軍に所属する魔女っ子は例外なく士官待遇である。

早苗のような特例中の特例はともかく、通常、魔女っ子の階級は、下は少尉からはじまり、上は大佐まで、能力、経験、実績などに応じて随時昇進してゆく。

実際には、魔女っ子が活躍できる期間は概して短く、佐官級まで昇進できる者は稀だが、この日、魔法戦艦いずみに参集した五名は、全員が少佐の階級を有し、経験実績いずれも海軍トップクラスという精鋭たちであった。

――その顔ぶれは。

コードネーム「魔法の閃光ユミ」

雛園祐美、十一歳。

五名のうちでは最年長。その容姿や物腰も、他の四人と比較すれば、かなり大人びているように見える。

魔法のブレスレット「コズミック・スター」の所有者。その魔力で二十歳前後の美貌の女性へと変身し、空中に無数の光の槍を生みだして自由自在に操り、遠距離からあらゆる敵を討ち貫く。星々の輝きをまとい、あでやかな漆黒のロングドレスをひるがえして優雅に戦場を舞う姿から、海軍内では、星の女王と呼ばれることもある。コードネーム「魔法の烈風ハルカ」

所沢遥、八歳。

くるりと大きな黒い瞳と、ショートカットの黒髪が印象的。

普段は引つ込み思案でおとなしいが、古代遺跡から発掘されたという魔法の指輪「ドラウプニル」の魔力で、しなやかなアスリート風の少女拳士へと変身成長する。その剛拳は音速を超え、その怪力は巨大戦艦を片手で放り投げるといった格闘の鬼。変身中は性格も一変し、勇猛果敢で強気一辺倒という、より戦闘向きのメンタリティを備えるようになるが、少々血気にはやりすぎる一面もある。

コードネーム「魔法の剣豪リン」

高宮鈴、十歳。

腰まで届く長い黒髪の少女。前髪は額に垂らして切り揃え、雪白の肌、眉涼やかに、伏せがちの睫は黒々と濡れて、さながら市松人形のように、物静かで儚げな風情を漂わせている。

普段はシンプルなワンピースをゆったり着こなしているが、実戦時には黒袴姿に白鉢巻の合戦装束を身にまとい、この世にただ一振りという魔法の日本刀「荒光」を握りしめ、真っ先に敵勢へ斬り込んでゆく。その刃は鋼鉄を断ち割り、海を裂き、山をも砕くが、蒟蒻だけは斬れない、らしい。

コードネーム「魔法の精霊マリ」

彩賀真里、七歳。

一同のうちでは最年少。フリルたっぷりのサンドレスで身を飾り、小柄な体を目一杯に動かして懸命に自己表現する姿は、さながら風に揺れる鈴蘭のごとし。

茶色がかったくせっ毛と、人懐こい笑顔が特徴。「フラワー・メダリオン」という魔力源を胸にさげ、魔法のドレスを身にまとい、魔法のホウキで空を飛び、魔法のジョウロで虹を描き、魔法のスコールを降り注がせる。

彼女の魔力は多方面に様々な効果を発揮する。兵器類や攻撃魔法を無害な植物に変化させたり、傷ついた人々に癒しをもたらすことや、戦いに破壊された自然環境を復元するなど、ほぼ万能に近い力

を秘めている。

コードネーム「魔法の熾天使ミカ」

池上美佳、九歳。

普段はこれという特徴もない普通の小学生だが、ひとたび魔法の宝杖「プリンス・バーナー」を握りしめれば、たちまち紅蓮の炎を身にまとう灼熱の魔法少女となる。

その魔力は単独で大都市を焼き尽くす熱量と破壊力を秘め、海軍内では、歩く絨毯爆撃とか天翔ける火薬庫とか、なにやら物騒な異称で呼ばれることも多い。

いずれ劣らぬ力量を誇る、五人の小さな魔女っ子たち。

彼女らは魔法戦艦いずみの直掩部隊となるべく配置され、形式上は艦長たる早苗の直属であった。

ただし作戦行動時には、魔法戦艦いずみそのものが第七魔法戦隊司令部の隷下に入るため、実質上、戦隊司令たる塚口提督が彼女らの戦闘指揮を執ることになる。

「さつきは、心臓とまるかと思った……」

早苗は、困り顔でストローをくわえ、グラスのメロンソーダを一気に吸い上げた。

艦内カフェテラスの一隅。

早苗と、魔女っ子たち五人と連れだって、親睦会がわりのティータイム。

白い円卓に紅茶やジュース、ケーキやクッキーやらを並べ、たがいに笑いさざめきあいつつ、食べたり飲んだりはしゃいだり、皆すっかりくつろいだ様子である。

五人の魔女っ子たちはいずれも異なる方面の部隊から召集されており、もとは互いに一面識すらなかったが、三日前、呉の海兵団施設ではじめて合流し、いずみの帰還までの間、寝食をともにしていたという。もとより順応力ある子供たちのこと、三日も交われば十

年来の戦友も同然の仲である。

「そんなにビックリした？ 連絡、そっちにいつてなかったのかなあ」

美佳が首をかしげる。早苗は意外そうな顔つきで応えた。

「連絡なんて何も……だから、まさか美佳ちゃんがここに来るなんて、思ってもみなかったよ」

「あたしも、つい今朝、聞かされたところだったんだよ。サナおねえちゃんが軍隊に入って、いまは戦艦の艦長さんやってるって。であたしたちも、今日からその戦艦に乗るんだって。そんなの全然知らなかったから、あたしもビックリした」

「そりゃ、まあ……、入隊したの、たった二週間前のことだから……。ただ、あたしも、そのことを美佳ちゃんに報告しようと思ってただけだね。急に配属先が変わったとかで、全然連絡つかなくて困ってたのよ」

「ねーねー」

と、横あいから、最年少の彩賀真里が早苗に笑顔を向ける。

もとは魔法戦艦「かが」の所属で、おもに日本海方面の戦闘に参加していたという。

「艦長さんも、魔法つかえるんだよね？」

「んー、一応ね。でも、みんなみたいに、戦いに使えるものじゃないけど」

「そうなの？」

「そう。でも多分、みんなの役には立つと思うよ」

「お料理の魔法……でしたっけ。ミカちゃんから聞いていますよ」

こちらは一同で最年長の雛園祐美。オレンジジュースを手に、おだやかな視線を早苗に向けている。

呉に出向く直前まで、魔法戦艦「むつ」の空戦隊に所属し、長らく最前線勤務を続けていたらしい。

早苗は微笑とともにうなずいた。

「今日からさっそく、みんなのぶんも作るから。楽しみにしててね」

「え？ 艦長さんが、みんなのゴハンつくるの？」

大きな目をぱちくりさせながら、そう尋ねるのは、所沢遥。

おっとりした顔つきからは想像もつかないが、一同では最も豊富な戦闘経験を擁し、魔法戦艦「ながと」の一員として太平洋全域を駆け巡ってきたという。

「他にゴハンつくる人、いない……の？」

その遥が、なにか不安そうにつぶやく。

（あたし、そんな頼りなく見えるかな……）

と、内心苦笑しながら、早苗は遥の髪を撫でてやった。

「いないんじゃないかね。あたし一人で充分なのよ」

「そうなの？」

と、遥は、なぜか美佳のほうをかえりみる。

美佳は誇らしげにうなずいた。

「サナお姉ちゃんのゴハンは、えーつと、テンカイッピン、だよ。すっごくおいしいんだから」

真里が、途端に目を輝かせ、声をあげた。

「へーっ、じゃあ、じゃあ、ホットケーキとか、つくれる？ おいしいホットケーキ！」

「それ、ゴハンじゃないよ」

「にゃー」

高宮鈴が、ふとつぶやいた。

左肩に、小さな黒猫がしがみついている。

この黒猫、外見からは生後数ヶ月くらいの子猫としか思われないが、実際は魔法の日本刀「荒光」の化身で、魔法生物とでもいうような存在であった。

彼女は、この荒光を携えて、おもにオホーツク方面を転戦しており、魔法戦艦「はるな」の主力として少なからぬ戦果をあげてきたらしい。

「えーっ、ホットケーキはゴハンだよー」

真里が口をとがらせる。

「じゃあ、じゃあ、リンちゃんは、どんなゴハンが好き？」

唐突な質問に、鈴は、眉ひとつ動かさず答えた。

「ビーフストロガノフ」

一瞬、一座の空気が止まった。

皆、やや意表を突かれたらしい。

遙が、きよとした顔で訊く。

「……びーふ？」

「煮込み料理よ」

「にゃー」

答えつつ、鈴は、ちらと早苗へ眼差しを向けた。なにか補足を求めているようである。

「え、えーっと、ロシアの煮込み料理ね。でも、考え出したのはフランス人のコックさんだったから、フランス料理ってことにもなってるわ。薄切りのお肉に玉葱、トマトなんかをスープで煮込んで、仕上げるにサワークリームを加えて、バターライスとかと一緒にいただくの」

早苗の説明に、一同、「へえー」と、感心したようにうなずいた。美佳がたずねる。

「なんか、すごいおいしそう。サナおねえちゃん、それ、作れる？」

「そりゃもちろん」

「わあ、じゃそれ、食べたーい！」

真里が身を乗り出すと、祐美も「わたしも食べたことないから、興味あるなあ」と、同意した。

「そういうことなら」

早苗は一同を見渡した。

「今日の晩ゴハンのメニュー、ビーフストロガノフに決定、ね。みんな、異議なし？」

「いぎなーしっ！」

魔女っ子たちは、元気に声をそろえて唱和した。

その頃、いずみ艦橋。

塚口提督は指揮座に腰を下ろし、魔女っ子たちの資料へ目を通していた。

かたわらには有田少佐の姿。

「魔法艦隊に属する各戦隊から、ひとりずつ……トッピースばかりを引き抜いて、ここへ集めたわけだな。まさに、錚々たる顔ぶれだ」

資料を卓へ投げ置き、腕を組む。

「軍令部のプランに、連合艦隊もよく応えているようだな」

「ですが……」

有田少佐は、わずかに眉をひそめた。

「まさか、わが艦単独で、晴嵐の要を遂行せよとは。以前、長官閣下からお伺いした計画には、そのようなことは何も……方針が変わったのでしょうか」

「不満か？」

塚口提督は、おだやかに有田少佐の顔をかえりみた。

「大艦隊をそろそろ引き連れても、むしろ邪魔なだけだ。この艦の戦力だけで充分、遂行可能だと思うがな」

「……それは、わかります。あの顔ぶれを見れば」

「ならば、少しは上の事情も汲んでやりたまえ。正面に米英艦隊という大敵をかまえ、一方で虹十字の要求にも応えねばならん。こういう曲芸をやらかすのに、軍令部も連合艦隊も相当苦心しているはずだ」

「……はい」

有田少佐が神妙にうなづくのへ、塚口提督は、かすかな笑みを浮かべた。

「こちらとしては作戦指揮に集中したい。当面、この艦での面倒事は、すべてきみに押し付けるざるをえん。苦労をかけるが、ひとつ頼むぞ」

「いえ、私などは。提督のほうこそ、これから大変ですよ」

「お互いさまだ。しかるべき時期までに、やれるだけのことをやる。それだけだ」

塚口提督は、軽く手を振った。退出せよ、との合図である。

有田少佐は敬礼をほどこし、艦橋から退出していった。

残った塚口提督は、卓上の資料をつまみあげ、あらためて資料の内容を一瞥していたが、そこへ担当官が歩み寄って告げた。

「連合艦隊総司令部より無線電話が入っております。虹十字からメッセージが届いた、とかで」

「……そうか」

塚口提督は、これあるを予期していたように、悠然と立ちあがった。

第三話「魔法戦艦、出撃」

通天閣地下三階、ラボ勤務者専用レストラン「ダブル・ピーチ」店内。

ラボの胃袋などと称されるファミリーストラン風の食堂である。日々、昼の仕事を終えたラボ職員たちが夜勤開始までの短い時間にここへ殺到するため、夕方はいつも満席近い。

「やっと座れましたね」

「あーもう、疲れたー」

混雑のなか、かろうじて店内奥のテーブルにつき、同時に安堵のため息を洩らす、白衣姿の若い男女。

人材資源情報部長の肥田妙子女史と、分析担当主任、井上和人の二人である。

「さて、今日は何を……」

メニューを開こうとする井上主任に、肥田部長が上機嫌で話しかける。

「今日は、そこそそ早く終われそうね。仕事、もうほとんど残ってないし」

「早いといっても、九時かそこらになるでしょうがね」

「いーのよ、終電までに帰れりゃ上等。明日は休みだしね」

「今月分の提出資料は出来あがってますから。あとはハンコを押していくだけです」

「それなだけどさ」

肥田部長は、少々思案顔でつぶやく。

「毎月毎月、こっちから何人ぶんも資料送ってさ、軍はそれ見て、あちこちで魔法少女をスカウトしまくってさ、たえず戦力補強してるわけじゃない。なのに、ここしばらく、いつこうに戦況よくならないよね」

「たしかに、あまり芳しい噂は聞きませんね」

井上主任はメニューを閉じ、うなずいた。

「こちらを押し返してはいるんですが、相手は硫黄島を根城にして頑固に居座り続けてますから。一進一退、なかなかうまくいかないようです。噂じゃ、あそこの米英艦隊には六十名以上の魔法少女が配属されてるとか」

「うわ、むちゃくちゃ多いじゃない」

「噂ですがね、あくまで。しかし、ありえない話でもないでしょう。いま現在、アメリカ海軍だけで魔法少女の全保有数は百名を超えてるそうですから」

「いつの間に……。あっちも、ずいぶん頑張って補強してたってわけね。こっちが旗色悪いのも当然か」

肥田部長は、ため息ひとつ、一気にお冷を飲みほした。

——戦争の様相は時代の変遷を映す鏡である。

歴史をかえりみれば、石器で殴りあっていた太古から、一方が青銅器を持ち出すや、これへ対抗するのにまた一方も青銅器を揃え、鉄器には鉄器、銃砲には銃砲、航空機には航空機、ミサイルにはミサイルを——と、新たな兵器の出現が戦争の枠組みを塗り替えてきたことがわかる。

およそ二百五十年前、魔女っ子という特異な存在が忽然、この世に現れると、また歴史の例に倣うように、戦場へ革新がもたらされた。

火災、稲妻、暴風、洪水……、様々な自然の破壊力を自在となし、空を駆け、海を往き、宇宙空間すら制する「戦う魔女っ子」たち。その小さな肉体は、不思議な魔力の加護に満ち、銃弾も刀剣もいっさい通さず、あらゆる通常兵器の威力を無効化し、いかなる事態にも決して致命傷を負うことがないという。

世の多くの国家、軍隊は、この恐るべき少女たちを、あるいは傭兵として迎え、あるいは強制動員をかけるなどして、さほど深い思

慮もないまま、続々と戦場へ送り込んだ。

市街戦、野戦、海空戦、水中戦、衛星軌道戦、上陸戦、侵攻戦、防衛戦——たちまち魔女っ子たちは世界中あらゆる戦場を席捲し、入り乱れ、飛び回り、激突した。

通常兵器は無用の長物と化した——魔女っ子は、魔女っ子の攻撃以外では傷ひとつ負わないからである。

これは同時に、旧来の戦争スタイルの崩壊をも意味した。

従来、戦場の局地的勝敗は、そこへ投入さるべき火量と鉄量、職業軍人の練度などにより決定されてきたが、いまや勝利の鍵は、魔女っ子の存在の有無、彼我の魔女っ子の質量差にこそあり、正規の職業軍人などはサポート要員となり下がってしまった。

これは戦争という行為の意義を考えれば、かなり危険な状況である。

魔女っ子の多くは未成年児童であり、軍組織による統制も充分にはゆきとどかない。作戦目的とその遂行——という、戦場の駒として当然あるべき概念を、少女らはしばしば無視して暴走し、個人プレイに固執したあげく、結果的に敵も味方も壊滅に追い込むような事例が各地で頻出するようになった。

戦場に秩序なかりせば、それはもはや戦争ではなく、際限なき暴力の応酬にすぎない。古代はともかく、近代以後の戦争は、彼我の国益、その利得損害を秤にかける外交行為の一種であり、理性と統制と秩序とが必要不可欠であった。

事ここに至って、ようやく危機感を抱いた各国家、各軍組織は、魔女っ子を新たな戦場の主役と認めつつ、軍としての秩序を維持させるべく、多角的な法整備や組織改革へと乗り出した。ことに、旧来の用兵思想を脱ぎ捨て、魔女っ子の適正なる運用法を探る——いわゆる魔女っ子主兵思想の確立こそ焦眉の急とされ、新たな組織体系の創出、魔女っ子への教育、待遇改善、戦術研究、職業軍人側の意識変革など、山積する無数の課題へ粛々と取り組みはじめたのである。

同時に各国家間では、魔女っ子を戦争に用いるための新たな国際的ルールが次第に構築されつつあった。これを提言し、かつ、制定へ向け主導的な役割をはたしたのが、虹十字なる組織である。

——虹十字。

魔女っ子の出現から十数年の時を経て、魔力を失い引退した、世界各地の「もと」魔女っ子数千人、すなわち魔女っ子OBらにより設立され、現役とOBとを問わず、国境を超え、すべての魔女っ子の互助と権利保全とを目的とした大規模な国際協力団体である。この組織の仲介と運動により、まったく新しい戦時国際法の形成が急速に進んだ。

西暦三二五〇年。

虹十字主催の淡路島国際代表会議において、魔女っ子の軍事雇用、保護さるべき諸権利、国家間戦争の基本的手順など、新時代の国際戦争ルールをまとめあげた、いわゆる淡路島条約が制定される。

会議参加百九十八ヶ国中、百九十三ヶ国までが、ただちに条約に批准。ここに戦場の革新は成った。

条約発効を契機に、軍組織の改編も進み、魔女っ子を主兵となす戦闘手順も確立された。

戦略や基本戦術の立案は軍組織の任とし、いっぽう実戦は魔女っ子の独壇場として局地的勝敗の帰趨を委ねる。前線の職業軍人は、現場において指揮統率と監督責任を担い、魔女っ子の適切な運用に努める――。

こういう体制のもと、魔女っ子たちは、徹底的にルール化された新たな戦場へと続々降臨し、勇躍、火花を散らしはじめた。

超絶的な能力を誇る無数のスーパーヒロインたちが、花吹雪のごとく戦場に舞い、空を、海を、無限のステージとして、力と技の限りを競いあう。

淡路島条約の厳格な秩序のもと、都市や民間施設への攻撃は禁じられ、戦場にあっても滅多には負傷者も出ないほど人命保護が徹底されるようになった。

かくて。

戦場が、酸鼻をきわめる悲劇の舞台であつた時代は、遠い過去の物語となつた。

国家と国家の争いはなお世界に絶えずとも、その勝敗成否は魔女っ子という小さな戦争代理人たちの肩に委ねられ、さながら国際スポーツの延長でもあるように、気軽に語られるようになった。

国家や軍のなすべきは、より強力な魔女っ子を、より数多く揃えること。より魔女っ子が戦いやすい環境を整えること。

福祉設備の充実や、堅牢なる専用母艦、すなわち魔法戦艦の建造。児童への高い親和性と統率能力とを兼備した指揮官の育成。

もはや、戦争にまつわるすべての事柄が、魔女っ子を中心に回っているといつてよい。

西暦三四七二年六月現在、全世界で確認されている現役魔女っ子の総数は、虹十字の統計で八千九百五十七名。うち、軍隊および、それに準じた組織に属する「戦う魔女っ子」の存在数は、およそ二千五百名前後とみられている。

「うちの海軍は、いま何人だっけ。そこそこ揃つてるはずよね」
肥田部長が尋ねる。

テーブルには、「ダブル・ピーチ」本日のお勧めメニューというビーフストロガノフが、サフランライスに盛りつけられて、香気濃密に食欲を誘っている。脇に添えられたサラダも青々とみずみずしい。

井上主任は、ほくほく顔でテーブルを眺めわたした。

「あー、こりやうまそうだ……。えーと、海軍はいま、医療関係なんかも含めて、七十四人ですな。確か」

「アメリカが百人以上でしょ？ 足りないわねえ……。いただきますよう」

「ええ、そうしましょう」

二人は、同時に皿へスプーンを入れた。

「あ、なかなかいける」

「ビーフストロガノフのビーフってのは、牛肉って意味じゃないらしいですね……なんでしたっけ」

「たんに、薄切り肉って意味よ。どうでもいいけど、これ冬の料理よね」

「我々は一年中、ラボの中ですからねえ。いまさら季節感もなにもあったもんじゃありませんよ」

「そうねえ……で、なんだっけ、あれよ、魔法少女の数。このままじゃ、こっちが負けちゃうじゃない？ そりゃ、いまどきの戦争なんて、たとえ負けても、ちょっと領海が狭まる程度で済むけど、やっぱ癪にさわるじゃない、そういうの」

「海底の地下資源なんかもごっそり持っていけますし、多分、捕鯨もできなくなりますね。勝つに越したことはないでしょうが、現状ではなかなか……何か、決定的な一撃が欲しいところですね」
アラームが鳴った。

肥田部長の携帯端末である。

「何よもう、食事どきに」

白衣のポケットから端末を取り出し、スイッチを入れる。

ホログラフディスプレイに、長々と文字列が並んだ。

肥田部長は不審げに画面を眺めていたが、内容を読み取るや、目の色が変わった。

「これって」

「あれ、どうしました？」

井上主任が尋ねると、肥田部長は端末画面を突き出して「読んでみて」と促した。

「いいんですか？　じゃあ」

と、一読して、井上主任もまた、驚いたように顔を上げた。

「こりゃ、虹十字の——」

「ええ、公式協力要請……それも、かなり緊急を要するみたいね」

「何事ですかね」

「わからないけど、とりあえず、食事が済んだらオフィスに戻って、あちらと連絡をとりましょう」

「そうですね。……しかし参りましたね、これじゃ今日は帰れないかもしれませんよ」

「それで済めばいいけど。下手すると、明日の休みもなくなっちゃうかも……あそこに逆らうと、後が怖いし」

「ですな。世界最強の圧力団体ですから。何を言ってくるやら……」

「休む暇もないんだから、ホントにもう」

肥田部長は、少々ふてくされたような顔して、端末をポケットに放り込んだ。

魔法戦艦いずみ艦長室。

時刻は二十三時過ぎ。

早苗はパジャマ姿で備え付けの天蓋ベッドに横たわり、ひとり思索をめぐらせていた。

いずみは翌朝には呉軍港を進発し、作戦行動に入る予定となっている。

作戦内容は、まだ聞かされていなかった。塚口提督は進発後に会議を招集し、そこであらためて説明するという。

（塚口、提督……か）

いわゆる、こわもての軍人で、近寄りがたい雰囲気を漂わせているが、とくに口うるさい印象はなかった。むしろ口数は少ないほうで、何を考えているのか、ちょっと測りしれない。

この日の晚餐でも、せっかく腕によりをかけてこさえたビーフストロガノフについて、ひと言の感想だに聞き出すことができなかった。子供たちや、他の乗組員らは皆喜んでくれていたようだ。

思えば——社会人経験のない早苗にとって、塚口提督は、生まれて初めての直接の上司ということになる。

(……仲良くやっていければいいけど)

悪い人ではない、と思う。

ただ、それも直感的な印象にすぎず、実際の人柄がどういうものかは、まだこれから、仕事上のやりとりのなかで、少しずつ把握してゆくことになるのだろう。

(なんで上着のボタン、外してるんだろ。不良みたいでカッコ悪いよ、あれは)

塚口提督は、故意に軍服の着こなしをだらしく見せかけているようだった。なにかポリシーのようなものでもあるのかもしれないが、早苗には如何とも理解しがたい。

男の人って、よくわかんない――。

声には出さず、内心、そうつぶやいてみたところで、忽然、控えめなノックの音が聴こえ、早苗は思わずベッドからはね起きた。

「ど、どなた？」

ベッドを降り、ドアへと歩み寄る。ノブに手をかけ、そっと開いてみると。

「美佳ちゃん……？」

パジャマ姿の美佳が、小さなヌイグルミを両手に抱きしめ、やや物憂げな顔してドアの前に立っていた。

「サナおねえちゃん。あのね、一緒に……」

ぽそりとつぶやく。

「……ダメ、かな」

「寝つけないの？」

早苗は、そつとその場にしゃがみこんで、おだやかに微笑みかけた。

「うん……なんとなく」

「そつか……。じゃあ、今日だけ、ね」

「ほんと？ プロンも一緒にいい？」

プロンとは、美佳が抱えているヌイグルミのキャラクター名である。

丸々太った赤いドラゴンのような意匠で、口から火を吐くコミカルなキャラクターとして、数年前までアニメ放送などで人気を博していた。

ヌイグルミは当時、プロンの大ファンだった美佳へと、早苗が買いつけたものである。

「いいわよ。でも、明日からは、ちゃんと一人で寝るのよ？」

ぱっと、美佳の顔つきが明るくなった。

「うん、わかった」

二人はベッドに入った。

美佳は、心底嬉しそうに、早苗の胸にしがみついて頬をすり寄せてくる。

「へへー、いいにおいー」

「ほんと、相変わらずだね、美佳ちゃん」

そういつつ、早苗も、まんざらでもない様子で、美佳の肩を抱き寄せている。

「こうしてると、なんか思い出すなあ。美佳ちゃんって、赤ちゃんのときから、こんな感じだったなあって」

隣家に美佳が生まれたのは、早苗が高校生のときだった。家を空けがちな美佳の両親に頼みこまれて、美佳を預かる機会が多かったのである。当時から、美佳は早苗によく懐いた。とにかく元気で、いつもせわしなく動き回り、泣くとなかなか鎮まらない。それが早苗の胸に抱かれると、ぴたりと泣きやんで笑顔になる。そういう赤子だった。早苗もそれに応えようと、必死に育児の知識を身に付け、実母以上といっていいほど、かわいがってきたのである。

「赤ちゃんのときのことなんて、もうおぼえてないよ」

美佳はちよっぴり苦笑いを浮かべた。

「でも、なんとなーく、おぼえてる気もするよ。やわかくってー、あったかーい感じ。ちようどこんな」

言いながら、美佳は早苗の胸の谷間に顔をうずめた。

「ちよ、美佳ちゃん……」

早苗が呼びかけると、美佳は顔をあげて、じっと早苗の顔を見つめた。

「ね、これから、ずっと一緒に働けるんだよね、ここで」

「うん。ずっとかどうかは、まだわからないけど……」

「ずっと一緒にいいなあ」

「そうね。今度、偉い人に頼んでみようか……」

「ね、サナおねえちゃん」

「ん？」

「サナおねえちゃんも、あの誓い、やった？」

「誓い？ ああ、虹十字のね。研修の三日目に虹十字の人が来て、登録とか説明とかあったから。そのときにね」

淡路島条約の制定以来、いずれの国家、地域に関わらず、軍隊、もしくはそれに準じる組織へ属する魔女っ子には、例外なく虹十字への正式登録が奨励される。

登録後は、いかなる状況下でも、虹十字の庇護のもと、組織内で一定以上の待遇を受ける権利、福利厚生の実施を受ける権利、正当な理由ある場合に限り勤務を拒否する権利、時期を選ばず自由に退役できる権利、などが保障される。

これら諸権利と引き換えに、虹十字からもまた、魔女っ子に、ひとつの絶対的な義務を求める。

それは、ある「誓い」を立て、その内容を可能な限り実践することであった。

「あれって、軍隊の人とかには話しちゃいけないんだよね。おとーさんやお母さんにも」

美佳が、早苗の胸もとにヌイグルミのブロンを押し込みながら言う。

「へへへー、ブロンが照れて、まっかっかになったー」

「こ、こら、挟まないで。……あたしも、あの誓いは魔法少女だけの秘密の誓いだから、普通の人には内容を教えないようにって、ずいぶん念を押されたわ」

「それじゃー、もうサナおねえちゃんも、あたしたちの仲間なんだね」

「そうよ。だから一緒に頑張るの。まあ、あたしは……戦うのは無理だけど、ゴハンくらいは、いくらでも作ってあげられるから」

「うん。そだね。いっしょに、がんばろー……」

応えつつ、美佳は、ふと小さな欠伸ひとつ。

早苗は、美佳の髪をそつと撫でて、ささやきかけた。

「さ、もう寝ようね。明日は早いから」

「うん……朝から、出発だもんね……」

美佳は、とろりと瞼を閉じながら、ごく自然に、早苗の胸へすっぽり頬をうずめた。

「おやすみ……サナおねえちゃん」

「うん、おやすみ」

早苗は、優しく美佳の背を抱いてやった。

ほどなく、美佳は、早苗の胸のなかで安らかな寝息をたてはじめる。

その小さなぬくもりを感じながら、早苗もやがて穏やかな眠りへと誘われていった。

払曉。

呉ドック内、魔法戦艦いずみ艦橋。

昨夜遅くまで続いた物資搬入と新規人員の乗り込みも既に完了し、艦橋には第七魔法戦隊の首脳部が集結して、進発の時を待ちうけていた。

その主要な顔ぶれは、戦隊司令塚口修一少将、専属副官高木中尉、戦隊副司令湯山大佐、戦隊首席幕僚渡辺中佐、などの面々。

そして、魔法戦艦いずみ艦長、神楽早苗軍属大佐、いずみ副長、有田聡子少佐をはじめとする艦内スタッフ陣も、それぞれ配置について準備をすすめている。

もつとも、早苗は相変わらず艦長席に座っているだけで、その脇では有田少佐が各部署との連絡や関係データのチェックなど、かいがいしく立ち働いていた。

機関室から連絡が届く。水素変換エンジン、始動準備よし——と。電源管制室、各主砲塔、艦載機格納庫、A M C 制御室など、続々、問題なしとの報告が寄せられ、いよいよ艦内の態勢は整いつつある。「艦長どの、エンジン始動の号令をお願いします。……先ほどお教えしたとおりに」

有田少佐に促され、早苗は、やや緊張気味にうなずいた。ひと呼吸置き、号令をかける。

「全艦、メインエンジン始動」

関係スタッフが一齐に復唱しつつ、操作盤へ情報を打ち込みはじめた。

機関室から連絡が入る。

メインエンジン始動。稼働率、順調に上昇中——。

「微速前進。ドックを出ます」

早苗のあらたな指示に、「微速前進、宜候」と、操舵手が声を発した。

魔法戦艦いずみは、そろそろと水上を滑り、暗いドックの大屋根を抜け、明けの陽光あふれる晴空の下へと進み出た。

陽はまだ低く、風おだやかに波は凪いで、見渡す一面の海は旭光のもと金細工のようにちらちら揺れ輝いている。

塚口提督が指揮座から立ち上がった。

「まずは豊後水道を抜け、韜晦行動をとりつつ小笠原周辺海域を目指す。——第七魔法戦隊、出撃する！」

腹に響く重さと力感に満ちた声は、電流のごとく、たちまち人々の背筋を正し、艦橋の空気を引き締めた。付け焼刃の早苗などと比較にならぬ、威厳堂々の大号令である。

（すごい——）

早苗は内心深く感銘しつつ、気持ちだけは負けじと、続けて号令

した。

「全艦、発進！ 進路百九十、巡航速度にて豊後水道を經由し、小笠原へ向かいますッ！」

少々、声がうわずったように思える。が、周囲はとくに氣にとめていないようだった。

この号令一下、魔法戦艦いずみは、艦首を湾口へ向け、次第に速度を増しつつ進みはじめた。艦橋から臨む風景が目まぐるしく転回し、流れてゆくことで、そういう艦の挙動を実感できる。

有田少佐が横あいから、声をひそめてささやきかけてきた。

「上出来ですよ。あとほんの少しだけ、肩の力を抜いてくだされば完璧です」

「そ、そう？ やっぱ、ちょっと力入りすぎちゃったかな」
ごまかすように笑う。

もともと、つい先刻、この号令を「自分でやってみたい」と言い出したのは早苗自身だった。試験航海中、有田少佐が事ごとに号令を発している姿を見るにつけ、なんとなく、これくらいなら自分にもできるのでは、と思ったのである。

とはいえ、実際やってみると、なかなかイメージどおりの声が出ない。まして艦橋後部の高座には塚口提督はじめ第七魔法戦隊司令部の面々が陣して、自分を注視している。緊張もいや増すというものである。

「すぐに慣れますよ。頑張ってください」

有田少佐は、ほほえみながら、励ますように言った。

「うん……そうね、頑張らなきゃ」

早苗は素直にうなずいたが、ふと何か気付いたように顔をあげた。
「あ、忘れるとこだった」

「はい？」

「朝食の支度しなきゃ。そろそろ、子供たちも待つてるだろうし」
逃げ口上である。本来なら、早苗はこの後もしばらくは艦橋にとどまって、じつと艦長席に座し、周囲の仕事を見守っていなければ

ならない。この退屈な状況から、少しでも早く逃れようという心理であった。

「というわけで、少佐、あとよろしく！」

そう告げるか早いか、ぱっと背を向け、もう出入口へ駆け出している。

「あ、艦長どの……、そうお急ぎにならなくても」

声をかけるも届かず、早苗は急ぎ足に、さっさと艦橋を出ていつてしまった。

取り残された有田少佐は、少々苦笑しつつ、艦橋後方の塚口提督らをかえりみた。

塚口提督は、無言で有田少佐にうなずきかけた。好きにさせてやれ、との意思表示のようである。

「なかなか元気なお嬢さんだ。しかし、一艦の長としては、まだ自覚が足らんようですな。どうなることやら」

戦隊副司令の湯山大佐が、白い口髭の下に笑みを浮かべて、塚口提督へ感想を述べる。

「いや……あれはあれでいい」

塚口提督は表情を消して応えた。

「我々の目からは、なんとも頼りなく見えるが、子供たちには、かえって親しみやすkarou。そのほうが、こちら都合がいい」

「ははは。確かに、お堅い軍人よりよほど気安いでしょ。軍令部とすれば、最初からそれを見越してこういう配置をとったと」

「そういうことだ。いま彼女がなすべきは、この艦の子供たちから可能な限りの信任を得ること、心理的同調を高めることだからな」

「それまでは、我々が戦闘指揮を担い、あのお嬢さんをフォローし続ける、というわけですな。それが我々の仕事だと」

「そうだ。それに、米英艦隊との小競り合い程度なら、いまの状況でも充分勝てる。問題は……」

塚口提督は腕を組み、顔をあげて、窓外はるかにひろがる海面をじっと睨まえた。

五月三十日午前七時、軍令部は第三次小笠原海域奪回作戦「晴嵐作戦」を発動。

これにともない、徳山沖より第三、第四魔法戦隊、柱島より連合第二艦隊、沖繩からは第四、第五航空戦隊が、それぞれ一斉に錨をあげ、小笠原海域へ向けて進発した。

もとより、小笠原周辺は日米英の最前線である。戦況は一進一退、予断を許さず、業を煮やした連合艦隊は、この膠着を打破すべく、いよいよ乾坤一擲の攻勢に出た。

一方、時を同じくして、呉から新設の第七魔法戦隊が出撃し、やはり小笠原へと向かいつつあった。

大阪学究都市のほぼ中央、日本橋電気街の北辺付近にそびえる全高千六百メートルの超高層タワービル、ジグラット。

高層建築揃いの学究都市にあつて、ひととき規模雄大、雲を突き天地を貫く円筒タワーの威容は、昼には陽光燦爛、夜には電飾恒々と人目を引いて、完成よりおよそ二十年、大阪のいわゆる新ランドマークとして定着し、旧ランドマークたる通天閣とともに地元の人々に親しまれている。

その名は、とある建築設計者が、起工に臨んで「天に挑む」という意気込みをもって命名したといわれる。

ジグラットという語の意味するところは、古代バビロニアにおいて神々を祀るべく数多く建造された「神殿」もしくは「塔」であり、かの有名なバベルの塔も、そうしたジグラットのひとつであったという。

「ようするに、現代版バベルの塔ね。どうもネーミングセンスが陳腐だわ」

スーツ姿の肥田妙子女史が、肩をすくめて呟いた。

ジグラット外郭部を縦貫する展望式高速エレベーター。

上昇中のゴンドラ内に肥田部長と井上主任のコンビがたたずみ、ガラス張りの内壁に寄りかかって、一刻ごと遠ざかる地上の光景を、そろって物憂げに眺め続けている。

「長い……ですねえ、さすがに」

井上主任が、退屈顔で述べる。肥田部長同様にスーツ姿だが、あまり慣れていないようで、どことなく着こなしがぎこちない。

「あと少しよ、辛抱なさい」

「さすがは世界でも五指に入る巨大ビルですな。もともと、テナントの三分の一も埋まってないって噂ですが」

「そりゃ、三百階もあればね。完成から二十年の歴史のなかで、全フロア埋まったためしなんて一度もないそうよ。テナント料も高いし。もつと安いビルが近所にいくらでもあるんだから、当然、みんなそっちに行っちゃうでしょ」

「虹十字だけは、ずっと最上階に居座り続けてますがね。代表事務所の移転設置以来、もう十五年になるとか」

「どうせ、何かカラクリがあるんじゃないの。所有者に圧力かけてテナント料をまけさせてる、とか」

「ありえますね……」

チャイムが鳴り、目的のフロア、すなわち日本虹十字代表事務所への到達が告げられた。

ドアが開くと、制服姿の女性係員が出迎え、二人を応接室へ導き入れた。

ソファにて待たされること数分。廊下から、なにやら慌しい靴音が近づいたかと思うと、ドアの手前で静止した。身だしなみを整えているらしい。

やがて、準備を済ませたか、そつとドアが開かれた。

「お待たせしました」

取り澄ました顔で、しずしずと室内へ踏み込んできたのは、ウェーブのかかった黒髪、長い睫、ルージュ鮮やかに美貌きわだつ年若

い、あるいは年若く見える女性である。

楚々とファイルを小脇に抱え、タイトスカートから伸びる脚もすらりとみずみずしい。

肥田部長と井上主任は、ソファから立ち上がって一礼した。

二人の面持ちには、普段にも似げず緊張の色がにじんでいる。

いま眼前に立つ女性こそ、かつて虹十字ルクセンブルク総本部の重鎮であり、現在では日本虹十字の最高責任者として日本政府からも一目置かれる最重要人物であることを、二人は知っていたのである。

「肥田博士、井上博士のお二方でいらっしやいますね。わたくし、日本虹十字総代表、神楽瑠衣と申します。どうぞよしなに」

神楽瑠衣、すなわち早苗の母親は、銀鈴の鳴るような声で自己紹介し、優美に微笑んだ。

「敵が動いたようだよ、ボブ」

小笠原諸島、西之島北方二十マイル。

アメリカ海軍太平洋第七艦隊旗艦、揚陸指揮艦「パープル・リッジ」艦橋。

艦隊司令官ハリー・クリンスマン大將は、電信官のもたらした紙片を開きつつ、かたわらに立つ参謀長ボブ・ギブソン中將へ苦々しい声と表情で告げた。

「こんな時にか。厄介な」

応えるギブソン中將の声にも、かすかな苛立ちがこもっている。

「こちらは、それどころではないというのに」

クリンスマン大將から紙片を手渡されたギブソン中將は、その内容を一瞥しつつ、恨めしげにつぶやいた。

「これはまた、なんとという規模だ。まさかジャップども、我々の事情を知っているわけではあるまいが」

「……まだ、手がかりもつかめんか」

クリンスマン大将の問いに、ギブソン中將は嘆息まじりに首を振ってみせる。

「まったく駄目だ。イオージマから、このオガサワラ、イズの周辺まで、潜水艦も海底探査船も総動員し、各島嶼には海兵隊のほぼ全員を上陸させて、もう一ヶ月も搜索を続けているが……」

「そうか……」

クリンスマン大將は、指揮座に背を預け、疲れたように肩を落とした。

「なんとか発見せねば、我々として動くに動けんのだ。搜索は続けてくれたまえ。敵の迎撃は当面、イギリス人どもに任せておけばよろう」

「承知した。そのように手配しておこう」

「ガールズの様子はどうかね」

「なんとか秩序は保っている。しかし、一部には激発寸前の者もあるようだ。特にルーシーは危険な状態だ。相当いきり立っている。いつ単独で飛び出してもおかしくない」

ガールズとは、アメリカ軍における魔女っ子の総称である。

「無理もないな……だが、なんとかこらえてもらわねば、色々と厄介なことになりかねん。ボブ、虹十字やイギリス人どもには、この件はまだ漏れていないだろうな？」

「むろん、厳重な緘口令を布いてある……ひとたび露見すれば、虹十字は我々に強制停戦を呼びかけてくるだろう。そんなことになつては、わが合衆国海軍の威信は地に落ちる」

「そうだな。そして停戦が長期化すれば、ジャップどもは、こちらが手出しできぬのをよいことに、これまでと変わらず世界中の鯨を喰い殺し続けるだろう……。もとより我が合衆国は、その蛮行を阻止すべく、彼らに宣戦したのだ。それを貫徹しえぬまま停戦など、決してあってはならんことだ」

クリンスマン大將は吐き捨てるように言い放った。

——捕鯨の是非は、この千五百年あまり、日米のみならず全世界

を巻き込んで喧々譁々の議論が続く懸案事項である。この捕鯨問題を扱う日米の外交交渉のもつれこそが、今次の日米英戦争のそもその発端であった。

「だがハリー、搜索は続けるにせよ、最悪の事態も想定しておかなばならん。我々も、辞表を用意しておくべきだろうな」

「ああ、……確かに」

二人は同時に溜め息をついた。

「行方不明？」

白磁のティーカップ片手に、肥田部長が訊き返す。

「ええ、そうです」

瑠衣がうなずくと、肥田部長は、信じられないという顔して、傍らの井上主任をかえりみた。

「主任……そんな話、聞いてた？」

「いえ、まったく初耳です」

「そうですね」

瑠衣は、テーブル上のカップにミルクを注ぎつつ、当然といわんばかりに応えた。

「この件については、我々が手を回して嚴重な情報統制を敷いていますから」

「……しかし、にわかには信じがたいお話です。詳しくご説明いただけますか」

「むろんです。そのために、お二方に、ここまでご足労願ったのです」

瑠衣は、カップを取り上げ、軽く口をつけてから、表情をあらため、語りはじめた。

「我々が把握しているなかでは、最初の発生はおよそ一年前。南極に近い、マクドナルド諸島付近の空域にて、フランス空軍の輸送機が突然、消息を断っています。この輸送機には、フランス空軍所属

の魔法少女三名が乗り込んでいましたが、その他の搭乗員ともども、現在まで、その安否は不明です。以後、南極付近からアフリカ、ヨーロッパ全域へかけて、同様の案件が断続的に報告されています。これまでに確認されている行方不明者の総数は、合計五十七名。うち、魔法少女が三十四名。その全員が軍籍にあり、なかには各国軍でもエース級といわれる優秀な魔法少女も何名が含まれています」

「そんな大勢が……？」

肥田部長は、不審げに眉をひそめた。

「原因はわかってるんですか」

「ええ。結論から申しますと、彼女たちは誘拐されたのです。複数の証言や、魔法監視衛星のデータなどから、その裏づけもとれています」

魔法監視衛星とは、淡路島条約の改定条項により、虹十字のみが所有を許される特殊な人工衛星である。物理遠隔操作に特化した魔法っ子たちによって遠隔制御され、世界中あらゆる戦場を衛星軌道から監視し、映像データを記録する役割を担っている。現在、八基の魔法監視衛星が稼動中で、それらは虹十字直属の二十人の魔法っ子たちによって、二十四時間体制で運用されていた。

「……魔法少女を誘拐？」

井上主任が当惑顔で問い返す。

「そんなことが、可能なんですか」

「常人にはまず無理でしょうけど。同じ魔法少女であれば、強引に連れ去ることは可能です」

「では、実行犯は、被害者らと同じく魔法少女だと……？」

「ええ。それも複数……かなりの人数で集団として行動していることが、現在までの調査で判明しています」

二人は揃って絶句し、目を見はった。

魔法っ子といえば、おおよそ未成年、それもローティーンが中心世代である。そんな子供たちが組織的な誘拐行為を繰り返している、と瑠衣は告げたのだった。

肥田部長は、つい身を乗り出して尋ねた。

「何のためにそんなことを。目的は……」

「それは、首謀者に直接尋ねるしかありません。こちらでも、おおよその推測はついているのですが、まだ断定はできませんので」

「首謀者？」

「ええ。すでに判明しています。こちらの資料をご覧ください」

瑠衣は、携えてきたファイルをテーブル上に開いて、内容を示した。

どれ、と読み進めるうち、次第に、二人の目の色が変わりはじめた。

「……これ、本当なんですか」

肥田部長が、やや冷静さを欠いた表情で呟く。瑠衣は対照的な沈着さで「事実です」とだけ答えた。

いっぽう井上主任は、驚きより、むしろ興味深いといった様子で感想を述べる。

「なるほどねえ。二百六十年前の亡霊ですか……。この内容が事実とすれば、さすがに虹十字だけでは手を出しづらいでしょうな」

「ええ」

ふと、瑠衣の眦に厳しさが加わる。

「ただ、難題とはいえ、我が虹十字が魔法少女の互助、権利保全を標榜する組織である以上、かかる事態を放置しておくわけにはまいりません。被害はなお拡大し続けているのです」

言いつつ、ファイルをめくる。

新たなページには、年若い白人少女の顔写真が貼られ、姓名が記されていた。

「これは？」

肥田部長が尋ねる。

「つい先日、こちらに報告のあった、新たな行方不明者です。未確認情報で、まだアメリカ海軍側からの報告も受けていませんが、この少女は四月半ばごろ、伊豆諸島近辺にて日本軍と交戦中に、突如、

消息を断ったということです」

「伊豆諸島？ そんな近くで？」

「アメリカ海軍のほうでは、事実をあえて公表せず、なんとか内々に処理しようと躍起になっているようですけど。こちらには、そんな動向はすべて筒抜けですから」

「部長。この子は……」

井上主任が、何か気付いたように肥田部長へ顔を向ける。

「かなり有名な子よね。たしか、アメリカ太平洋第七艦隊の撃墜王でしょ。こんな子まで……」

「さすがに、よくご存知ですね」

瑠衣はうなずき、おもむろに姿勢を正した。

「おわかりでしょう。事はすでに日本近海にまで飛び火しているのです。我々はもとより、あなた方にとっても、もはや他人事ではないはずですよ」

「それは……確かに」

「まだ日本人の被害者は出ていませんが、このまま放置しておけば、それも時間の問題でしょう。そうなる前に、あれを止めねばなりません。具体的な方法はすでに検討済みですが、その実施にあたって、あなたがたのお力が必要なのです。ご協力いただけますか」

瑠衣の口調は、あくまでも静かに涼やかに、しかし眼差しは凜と二人を見据えている。

テーブルをさし挟み、三人の間に、わずかな沈黙が落ちる。

——やがて、肥田部長が力強く応えた。

「子供たちが危ないというときに、大人が傍観しているわけにはいかないでしょう。私どもにできることでしたら、なんなりと」

井上主任も同調する。

「ま、到底、お断りできるような状況じゃありませんね……それに相手が相手ですから。ある意味、我々のような学者にも、責任の一端があるような気がしますし」

そつ肩をすくめてみせた。

「ありがとうございます」

瑠衣は目もとをやわらげ、満足したように微笑を浮かべた。

「日本政府および陸海軍とは、必要な折衝を済ませてあります。すでに我々の提示した条件に沿って、海軍が準備を進めています」

「海軍が……？」

「ええ。我々は、虹十字単独での事件解決は困難と判断し、現在、日本海軍との協力体制を敷いています。むしろ、海軍も、いまは大変な状況ですから、まず日本近海の紛争に区切りをつけ、しかる後、我々との共同作戦に着手、という順序になるでしょう。——あなたがたには、この共同作戦の実施にあたり、必要となる各種データの提供と、技術的な支援とをお願いいたします」

井上主任が尋ねる。

「それは無論、協力は惜しみませんが……その共同作戦とは、いったい何ですか？」

「第七魔法戦隊……魔法戦艦いずみによる、南極大陸強襲作戦です」
事もなげに瑠衣は告げた。

第四話「魔法のフィッシュ・アンド・チップス」

五月三十一日午前十時。

伊豆諸島、鳥島西方海域。

イギリス東洋太平洋第二艦隊所属、魔法戦艦「ロドネー」艦橋。
艦長チャーチウッド大佐は、孫娘のアン・ベックウエルと並んで
船窓に立ち、白波うねる海面を眺めおろしていた。

現在、伊豆諸島近辺は日米英の激戦が続く最前線である。この日、
魔法戦艦ロドネーは哨戒のため、護衛の巡洋艦二隻とともに主戦場
を離れ、西へと航走していた。

日本海軍の「晴嵐作戦」発動から、すでに丸一昼夜が経過してい
る。

イギリス艦隊もその情報を受け取っていたが、敵艦隊の位置や進
攻ルートの詳細までは把握できず、厳重な警戒態勢を布いて敵の来
襲に備えていた。ロドネーの西方派遣は、その警戒強化措置の一環
である。

「どうだねアン、友達とは仲良くやっておるかね」

パイプをくゆらせつつ、チャーチウッド艦長は八歳の孫をかえり
みた。

「ええ、とっても仲良しよ」

アンは、ほがらかな笑顔で応える。一見、おさげ髪がよく似合う、
ただ可憐なばかりの女の子だが、歴とした大英帝国海軍所属の魔女
っ子である。戦功によって、英王室直々に「クリティカル・アン」
という特別なコードネームを授かっており、英国内では拔群の人気
と知名度を誇っている。

「お姉さまたちには、毎日お勉強を見てもらってるの。お茶のとき
は、わたしもお手伝いしてるわ。とっても上手だって、みんな褒め
てくれるのよ」

「おお、そうかそうか。さすが、私の孫だ」

「でも、あんまりおじいちゃんと会えないから、やっぱりちょっと寂しいな。せつかく同じ戦艦に乗ってるのにな」

「まあ、そう言うな……私にも立場というものがある」

背後から靴音が響いた。

二人が振り向くと、副長クリスチアンセン中佐が電文を手に歩み寄ってくる。

「艦長、哨戒機から連絡です。本艦現在位置より北北西およそ七十マイル付近にレーダー反応あり、南下中の敵艦影と認む、と」

「なに？ そんな方向から来るのか」

チャーチウッド艦長は軽く目をみはった。予想外のルートだったのである。

「で、敵の規模は」

「一隻です」

「……なに、単独航行だと。それは本当に敵艦なのかね」

「は。艦型を照合しましたところ、日本の魔法戦艦カワチ級に酷似しております」

「ふうむ。魔法戦艦が一隻だけ……か。ならば、おそらく陽動だな」
「いかなさいますか」

「決まっておる、迎撃だ！ それと、ガーランドに連絡しておけ。

これは陽動と思われる、別方面より敵主力接近の可能性あり、より一層警戒すべし、とな」

「はっ！」

クリスチアンセン中佐は敬礼をほどこし、艦橋中央へと駆け戻っていった。

「おじいちゃん、戦うの？」

「一隻とはいえ、魔法戦艦だ。放っておけば、どんな悪さをするかわかったもんじゃない。それに、ここで敵を見過ごしたとあつては、後々、ガーランドの若造に文句を言われることにもなりかねん」

「それなら、わたしも出るよ」

アンは決然と告げる。

チャーチウッド艦長は「うむ、さすが私の孫だ」とうなずき、慈愛に満ちた眼差しで孫娘にほほえみかけた。

「だが、くれぐれも気をつけてな。危ないと思ったら、すぐ戻っておいで」

「うん、わかった!」

アンは、元気よく艦橋出入口へと走り出した。

同時刻、魔法戦艦いずみ艦橋。

「敵艦隊、針路を変えてこちらへ向かってきます」

レーダー手から報告がもたらされる。

湯山副司令が白髭を撫でながらつぶやいた。

「やはり、見逃してはくれんか。やるしかありませんなあ」

「やむをえん。相手の戦力を黙らせ、一気にここを突っ切るぞ」

塚口提督は指揮座から立ちあがり、号令を発した。

「全戦隊、第一級臨戦態勢! 空戦隊発進準備!」

有田少佐が、艦長席へ緊張した眼差しを向ける。

早苗は黙してうなずき、有田少佐に艦の指揮代行を委ねた。まだ早苗は戦闘指揮の手順を教わっていないため、今回は傍観せざるをえない。

「全艦、第一戦闘配備! 火器管制チェック、アンチ・マジック・コーティング展開、空戦隊発艦準備」

有田少佐の指図とともに、けたたましいアラームが響き、たちまち艦内各所に緊張がみなぎった。

どの通路にも、所定の配置へ急ぐ人々の慌しい靴音が飛び交いはじめる。

叱咤、ざわめき、雑然と沸きたつなか、五つの小さな人影が、床を蹴り、息せき切って通路を駆けてゆく。

「ほらハルカちゃん、急いで急いで」

「ふええー、ちょっと待ってえー」

「マリちゃん、前見て走んなさい！ 転んじゃうから！」

「はい」

口々に声をかけあいつつ、スタンバイフロアを目指してひた走る、五人の魔女っ子たち。

「急がないとー」

「もう少しよ」

「にゃー」

すでにスタンバイフロアの鉄扉は開け放たれている。

五人は勢い込んで、続々と出入口へ駆け込んだ。四方の壁面に設置された赤色灯の明滅が子供たちを出迎える。

「あーっ、やっと着いた……」

美佳は大きく息をつき、周囲を見回した。

ここは魔女っ子だけが入ることを許される秘密の空間である。

古来、魔女っ子にとって、変身や武装の瞬間を一般人に目撃されるのは重大なタブーとされてきた。それによって魔力が減衰したり、あるいは思わぬ副作用が生じたりと、様々なトラブルが発生したのである。なぜそうなるのか、根本的原因はいまだ不明だが、そういう事情から、いわゆる魔法戦艦には必ず魔女っ子専用の特設な更衣施設が設置されるようになった。これがスタンバイフロアという区画で、近年はエレベーターリフトとの兼用構造が主流になっている。「さて、はじめましょうか」

祐美はポケットから銀色のブレスレットを取り出した。祐美に魔法の力を与える「コズミック・スター」である。

皆それぞれ、必要な道具を手に、変身、武装のための秘密の呪文をささやきはじめた。

——祐美の手のなかで、コズミック・スターがまばゆく煌きだす。そつと唇をつけ、右腕にするりとはめれば、たちまち蒼い光輝が拡がり、祐美の全身を包み込んだ。

ほどなく、祐美の髪はサファイアの光沢あふれる蒼色と変じ、顔

つき身体つきも大人っぽく、優美にしなやかに成長していた。服装も典雅華麗な黒のロングドレスへと変化し、各所に散りばめられた銀のスパンコールがさながら星屑のごとく輝いている。

「魔法の閃光ユミ」変身後の姿である。

——遙が右手を高々とさし上げる。

人差し指に輝く魔法の指輪「ドラウプニル」が黄金の光を天へと噴き上げ、空中に魔力を拡散させた。

巻き上げた金粉がふりそそぐように、おびただしい魔法の輝きが舞い降りて、遙の外見に変化をもたらしはじめる。

背丈はみるみる伸びて成人のそれへ達し、か細い手足はしなやかに逞しく、四肢がしっかりと力感あふれ、白銀のボディースーツが、引き締まった胴体を包み込む。その上からかぶさるように、桜色のジヤケットが上体を覆い、ボトムにも同色のフレアスカートがはためく。銀のナツクルが光をまとうて輝いた。豪腕が風を裂き、双眸煌々と闘志に燃える。

「魔法の烈風ハルカ」変身後の姿である。

「……いくよ、荒光」

——鈴が、肩にしがみついている黒猫へそつと語りかける。

「にゃー」

と応えて、黒い子猫は床へ降り立ち、四肢を張って、力を溜めはじめた。

不意に、小さな身体がかすかに震えたかと思うと、背中に、ぽつと青白い炎が生じ、子猫の全身を包んだ。ひと声鳴いて、ふわりと宙へ浮かびあがる。

青い炎のなか、鈴の眼前にて、子猫の姿はいつしか、ひと振りの短刀へと変じていた。

鈴が無造作に右手を突き出し、短刀の柄を握り締める。

途端、周囲に旋風が巻き起こり、鈴の着衣は瞬く間に切り裂かれて、一糸まとわぬ素裸となった。

短刀の刀身より青い炎が四方へ噴き出し、燃え広がって、鈴の全

身を覆い尽くす。

肌を焼く青い業火のなか、鈴は、苦悶に顔を歪めながら、一步前へと、力強く足を踏み出した。

炎はたちまち、渦を巻いて消え去った。

静寂が戻ったとき、すでに鈴の身は、白小袖に黒袴、白鉢巻に白足袋の「合戦装束」をまとい終えている。

黒い瞳は戦意凜々と燃えて、その右手には長さ三尺の業刀「荒光」が、鞘ごとしつかと握りしめられていた。

「魔法の剣豪リン」の武装した姿である。

——真里の胸に揺れる魔法のペンダント「フラワー・メダリオン」が七色に輝き始める。

真里は「でっておいでー！」と声かけつつ、フラワー・メダリオンを両手で軽く二度叩いた。

それに呼応するように、まばゆい光とともに、小さな魔法のジョウロ「レインボースコール」が空中へ飛び出してくる。

軽やかにステップ踏みつつ、えいっ、と右手でその柄を掴むと、はるか上天から無数の花びらが降り注ぎ、花吹雪となって真里の全身を包んだ。

花の嵐が渦巻くなかで、真里の着衣のサンドレスが、さながら大輪の薔薇が咲くように、ふわりふわりとフリルを開いて光を放ち、たちまちのうち、七彩の光輝をまとう可憐なショートドレスへと変貌した。

花びらの渦は、ぱつと散り拡がり、真里の眼前へと収束してゆく。真里が左手をつと伸ばすと、閃光がほとばしり、花びらは霞のようにかき消えた。

かわってその手には、虹の彩りまばゆい魔法のホウキ「レインボーブルーム」が握られている。

右手にジョウロ、左手にホウキ、髪には大きな赤いリボンが花と咲く。

「魔法の精霊マリ」変身後の姿である。

——かつて早苗から美佳へと贈られた、赤いドラゴンのヌイグルミ、プロン。

美佳が、その胸を両手に掴んで天に高々とさし上げると、たちまちプロンの背に光の翼が生じた。

まるで生きている猛禽のように翼をはばたかせて、美佳の手を離れ、宙へと舞い上がる。

小さなヌイグルミは、やがて猛々しき飛竜へと姿を変えて、轟く雄叫びをあげ、ふと顎を開くや、眼下へ立つ美佳めがけ、輝く火球を噴き出した。

美佳が右腕をあげ、迫る炎の塊を、その掌に受け止める。

炎は瞬時に消し飛び、かわってその手には、魔法の杖「プリンセス・バーナー」が握りしめられていた。

同時に、美佳の黒髪が、みるみる鮮やかな紅蓮へと染まってゆく。飛竜は、ふたたび雷鳴のごとくいなき、全身を赤光に包んで、

美佳の周囲を飛び回りはじめた。

閃光が炸裂し、爆炎が巻きあがる。

半瞬——。

激しい火焰は四方へ散って、消え去った。

あとに立つのは、見るも鮮烈な紅衣紅髪、その双眸まで焦熱に燃ゆる炎の化身。

額に輝く金のティアラ。右手には飛竜の魔力を秘めた短杖プリンセス・バーナー。

「魔法の熾天使ミカ」変身後の姿である。

——それぞれに武装、変身を終えた五人の魔女っ子たちは、互いに眼差しをかわし、うなずきあった。

「相手は、どんな子たちなのかな」

美佳がつぶやく。

いまや、うら若き妙齡の美女となった祐美が、ほほえみながら応えた。

「イギリスの子たちね。偵察規模なら、そんなに数は多くないと思

うけど」

「へえー。ねえねえユミちゃん、イギリスの子って、つよい？」

真里が横あいから声をかけるのへ、やはり大人の姿に成長している遙が、拳を握りしめ、不敵に言い放つ。

「なあに。どんな奴らだろうと、アタシらにかなうわけないじゃん。タコ殴りにしてやんぜ！」

大昔の不良少女を思わせる強気ぶりである。

「ハルカちゃん、性格すごい変わってる……」

美佳が苦笑を浮かべる。

遙は豪快に笑った。

「あつはつは。いやあ、なんでか、変身すると、こうなっちまうんだ。ま、細かいことは気にすんなくて。どんな敵でも、ぶつとばしてやるからさ」

「……そうね。立ちはだかる敵は、ただ斬り捨てるだけ。どうせ殺しても死なないし」

鈴が淡々と物騒な台詞を口走る。

艦内放送が流れた。

「発進口、展開」

五人は一斉に顔をあげた。かすかな機械の唸りとともに、天井が割れ、左右に開いて収納されてゆく。隙間から、快晴の青空が覗きはじめた。

続けて放送が響く。

「リフトアップ、スタート」

五人を乗せた鋼の床が、甲板へ向けてせり上がりはじめた。新造艦ゆえか、かなりの上昇速度の割に騒音も振動もなく、挙動も至極なめらかである。

ほどなくリフトアップが完了し、いずみの前部甲板上に、五人の魔女っ子たちが颯爽と姿をあらわした。

南国の太陽は天高く、強烈な光と熱を叩きつけてくる。

真里が、潮風に髪をなびかせながらレインボーブルームにまたが

った。とくにそうせずとも普通に飛べるが、「こつしたほうが、魔女っぽくてかわいいから」と本人は言う。

全員、それぞれ魔力の輝きをその身に帯びて、表情をひきしめる。「みんな、行くわよ！」

祐美の掛け声に、「おーっ！」と唱和しつつ、はるか南の空めざして、五人は一斉に甲板から飛びたっていった。

天気晴朗、視界良好。この条件ならば、高度を取り、太陽を背に突進すれば、先制も易し――。

出撃前、塚口提督から授けられた策である。

真里は対艦攻撃へ向かうべく、低高度から別行動に入る。他の四人はいったん高度五千メートルの上空まで翔けあがり、敵艦隊の迫る方角めがけて、降下突撃を開始した。

空を裂き、音速を超え、彗星のごとく駆ける四つの光を、はるか前下方から、数条のレーザー光が出迎える。英巡洋艦二隻による対空砲火である。

美佳が、ふと前方を眺め渡せば、鏡を打ち砕いたような煌きとともに、十名ほどの「敵」が群れをなし、闘志もあらわに身構えている。

美佳たち四人は視線をかわしあい、散開して、待ちつける敵勢の陣列へと躍りかかった。

英艦隊の魔女っ子らもまた一斉に武器をつがえて迎え撃つ。

華々しい極彩色の輝きが空中に炸裂した。

――鈴の一刀が、見えざる魔法の防壁を斬り裂き、敵ひとりを袈裟がけに叩き落とす。

遥の右拳が、前面に立ちはだかる敵を一撃に殴り倒し、吹き飛ばした。

その横ざまから、騎士甲冑をまとう英魔女っ子が迫り来て、剣を振り上げ、遥に斬りかかるとする。

祐美の操る光の槍が音もなく飛んで、敵の腹を撃ち叩く。そこへ美佳が紅蓮に燃える火焰の束を叩き込む。

騎士少女は短い驚声をあげ、もんどりうって海面へと落下していった。

美佳は息つく間もなくプリンセス・バーナーをかざし、念を集めた。

先端のルビーが妖しく輝いたと思うと、火球が生じて、急激に膨れあがってゆく。

「行くよ！」

気迫一閃、魔杖が唸り、いまや直径十メートルという巨大な火の玉が、轟音とともに敵集団の頭上へ落ちかかった。

爆炎があがる。

たちまち二人の敵がまとめて灼熱の渦に飲み込まれ、悲鳴絶叫おびただしく、そろって墜落してゆく。

「——あらあら、かわいそうに。全治二日ってどこかしら」

祐美が呆れたように呟いた。

「少しは加減して。私たちまで巻き込まれるわ」

鈴が、そつと美佳に苦情を述べる。

「あー……ごめん、リンちゃん。気をつけるね」

美佳は謝罪し、苦笑を浮かべた。

前方にはなお四人の敵が残って行手を阻んでいた。美佳の火炎の威力によほど驚いたのか、防御姿勢を取ったまま、身動きできぬ様子である。

「なーにビビってんだよ。さっさとかかってきな」

遙が挑発すると、各人、ようやく覚悟を決めたらしく、みな気丈な面持ちで武器を構えはじめた。

「ここからが本番ね」

言いつつ、鈴は荒光を鞘に収め、居合いの型をとった。

祐美がそつと呪文をささやく。右腕のコズミック・スターを天へかざすと、祐美の周囲に十数本もの光の槍が一斉に出現し、まばゆ

い煌きを放った。

鈴と遥が前方へ飛び込んでゆく。

美佳がその後に続いてプリンセス・バーナーをかざした。

祐美が右腕を振り下ろす。

十幾条の光槍が前方へ飛翔し、敵勢を激しく打ち叩く。

そこへ、美佳の爆炎、遥の鉄拳、鈴の居合いが、続けざまに炸裂する。

瞬時に、二人の敵魔女っ子が弾き飛ばされ、海面へと消えていった。

それでもなお、残った敵が、果然と反撃を仕掛けてくる。

黒衣をまとう英魔女っ子が、手にした錫杖を振りかざした。突如周囲に冷気が漂い、風を巻き、もっとも手近の位置にいる鈴をめがけ、一陣の猛吹雪が襲いかかる。

肌も凍てつく氷塵の渦に晒されながら、鈴はまるで通じぬというふうに、冷然、ゆっくりと振り向きざま、荒光を両手に掲げ、鋭く振りおろした。

真空の刃が凍気を裂いて、黒衣の少女の肩を打つ。

少女は思わぬ衝撃にのけぞった。

どうにか態勢を立て直したとき、すでに鈴は間合いを詰めている。閃刃、横薙ぎに胴を打ちすえる。

黒衣の少女は声もなく墜落していった。

常人なら一刀両断となりかねないほど強烈な斬撃も、魔女っ子にとっては、せいぜい打撲傷程度。「殺しても死なない」とはそういうことであつた。

鈴が荒光を鞘に収めたとき、最後の敵一人、白いマントを羽織る少女が、わずかに距離を取り、すばやく弓矢をつがえて、鈴へ狙いを定めていた。矢じりに青白い炎が宿っている。

魔法の矢が、鈴めがけて放たれ——横あいから遥が、鈴をかばうように立ちはだかつて、手刀一叩、事もなげに、飛来する矢をへし折った。

遥はそのまま敵めがけ突き進み、右脚をぐるりと回して、白マン
ト少女の脇腹へ一撃。さらに身をひねって左脚を突き出し、少女を
彼方へ蹴りとばした。

「パンチだけじゃねーんだぜ」

遥は、左脚をぽんと叩いて得意満面、白い歯をのぞかせた。

「次は母艦ね。まかせて」

裕美が右手を振り上げると、空中、新たに十数本の光の槍が輝き
生じた。

さつと腕を振りおろす。はるか前方遠く、豆粒のように浮かぶ敵
艦一隻をめがけ、光の槍が流星群のごとく飛ぶ。

ほどなく流星は目標点へと収束し、そこから黒煙がたちのぼりは
じめた。

「うまく当てられたみたいね」

裕美は満足げにつぶやいた。

裕美の放った光の槍は、英国側の指揮艦たる魔法戦艦ロドネーの
側面から、機関部のみを正確に撃ち貫いて、航行能力を奪ったので
ある。これでいずみが敵艦の追撃を受ける恐れはなくなった。

「……これで終わり？」

鈴が尋ねる。

「いや、もう一人いたはずだぜ。アタシらがここまで来る前に、敵
の本隊から離れてった奴がいる。たぶん、マリを追っていったんじ
やねえか」

「え、それなら急がないと。あの子ひとりじゃ危ないわ」

裕美が少々焦り気味につぶやく。遥が拳を握りしめながら応えた。

「よし。んじゃ、とつと行って、ぶつ潰すか」

「潰す必要はないのよ。状況を教えてあげれば、素直に母艦に戻る
でしょう」

「……素直に説得に応じればね」

鈴がぼそりと補足する。

美佳が表情をあらため、呼びかけた。

「とにかく、急ごう。早くマリちゃんと合流しなきゃ」
四人はうなずきあい、向きを変え、一斉に降下を開始した。

——その頃、海面上。

英巡洋艦サフォーク、コーンウォールの二隻は、ただひとりの魔女っ子の攻撃によって、瀕死の様相を呈していた。

「こんなふざけたやり方があるか！ これは我々への侮辱だ！」

コーンウォール艦橋にて、艦長ベンゲル中佐が叫んだ。

ホウキにまたがった少女が悠々と警戒ラインへ侵入し、無邪気に笑いながら艦上空を飛び回り、手にしたジョウロから虹色のシャワーを降り注がせるや、突如として、主砲、副砲、高角砲などの火器が、ヒマワリの群生に変化してしまったのである。

いまや、甲板上そこかしこ、無数の鮮やかな大輪の花々がうららかに揺れて、勤務する水兵らをうるたえさせていた。

ミサイル群はタンポポ畑と化し、機関砲座には赤白黄のチューリップが妍を競って咲き誇っている。

影響は甲板上にとどまらず、機関室内の水素エンジンまでもが巨大な藁束と化して、二艦は、その推進力を完全に喪失していた。

「だめです、もはや航行不能です」

副官の報告をうけ、ベンゲル中佐は「小悪魔め！」と、こみ上げる怒気を吐き出しつつ、空を見上げた。

ホウキにまたがった小悪魔——こと真里は、なお二艦の付近にとどまり、状況を確認していた。

「えーっとお、こっちは止まったし、あっちも止まったから……」

有人艦船はこれを撃沈すべからず、とは淡路島条約の戦時規定である。

対艦攻撃は無力化までにとどめる、というのが現代の海戦における約束事であった。

「もう動けないみたいだし、だいじょーぶだよね。そろそろ、みんな

なのところ行こつかなあ」

真里は、レインボーブルームを操り、上昇をはじめた。

高度およそ千メートル付近。前方遠く、なにやら光るものあり、目をこらせば、小さな銀塊のような物体が、淡い輝きをまとい、風を切ってこちらへ飛来しつつある。

「ひゃッ！」

真里は思わず首をすくめた。

小さな物体は間一髪、真里の頭上をかすめ去った。

「な、なに、いまの？」

真里が、おそろおそろ顔をあげると、視界のうちに、彼方より次第に近寄ってくる人影がある。

見れば、真里とほぼ同年齢くらいの小柄な少女で、ピンクと白のエプロンドレスに身を飾り、細い両脚には白タイツ、赤い靴。おさげの金髪に赤いリボンと、まるで童話からそのまま抜け出てきたような、ファンシー気分横溢のいでたちであった。

その手には小さなパチンコを携え、いままさに、新たな弾丸をつがえて、真里に狙いを定めている様子である。

「え？——きゃんっ！」

魔力を帯びた鋼の玉が驚くべき速度で飛んでくる。

真里はあわてて身をよじり、またも危ういところで回避に成功した。

「こらーっ、よけるなーっ！」

金髪の少女が咎めるように声をかけてくる。

「そ、そんなこと言われてもー」

真里が困惑顔で応えると、金髪の少女、すなわち大英帝国海軍所属の魔女っ子アン・ベックウエルは、なお接近しつつ、大声をはりあげて宣言した。

「このコメント・スリンガーと、クリティカル・アンの名にかけて！ おじいちゃんの船には、ゼツタイ近づかせないんだから！」

「……おじいちゃん？」

「そつよッ、カクゴなさい！」

言いざま、アンは再びその手のパチンコ——コメット・スリング——というらしい——を引いて、真里にさし向けてくる。

「うー、どうしよう。ここからじゃ……」

真里は、ちよつと思案顔を浮かべていたが、やがてレインボーブルームをひるがえし、急上昇をはかった。

真里のレインボースコールは、その形状ゆえ、相手より上空に占位しなければ効果を發揮できないのである。

「逃がさないよーっ、連続攻撃ー！」

アンは、乱れ撃ちといわんばかり、雨あられと鋼弾を放ってくる。見ためはともかく、その一発ごとに非常に強い魔力が込められており、当たれば真里といえど無事には済みそうもなかった。

「わっ、あつ、や、やめてってばー」

鋼弾は、鋭い軌跡を描いて、間断なく真里を狙い続ける。

いまや真里は身をかわすのに精一杯で、上昇する隙も見い出せず、進退窮まってしまった。

「それーっ、まだまだっ！」

アンは真里の都合などお構いなく、容赦なく打ち込み続けてくる。狙いは次第に精度を増して、とうとう一弾が、真里の眉間めがけ、まさに直撃せんとする、その刹那。

白銀の光の槍が上空より降ってきて、真里の眼前迫る弾丸を撃ち抜き、砕いた。

「えっ……なに？」

アンは、つい手を止めて、頭上を見あげた。

真里も、つられたように、きょとんと顔をあげる。

頭上十五メートルほど離れた空中に、祐美、美佳、遙、鈴の四人が並んで、二人を見おろしていた。祐美の右腕にコズミック・スターがまばゆく輝いている。

「ユミちゃん！ みんなーっ！」

真里はたちまち嬉声をあげ、笑顔で両手を振った。

「間に合ってよかった……」

真里の無事を確認し、祐美はほっとした様子で呟いた。

「その子。戦いは終わったわ。あなたたちの負けよ。もう母艦に戻りなさい」

鈴が冷静な声で告げる。

アンは不審げな顔つきをして、きょときょと周囲を見回した。

やがて一帯、味方の影すら見あたらず——という現状を把握するや、勃然、怒りもあらわに喚きはじめる。

「あなたたち！ お姉さまたちに、いったい何したのっ！」

「何……って？」

祐美が、やや気圧された態で訊き返す。

「あなたたち、なにか、ヒキョウな手を使っただんでしょう！ そうでなきゃ、お姉さまたちが負けるわけないもん！」

「え、そんなこと、何も……」

祐美は返答に窮した。

かわって美佳が答える。

「あたしたち、おたがい、正々堂々と戦ったよ。あとで、そのお姉さんたちに聞いてみれば、すぐにわかるよ」

「ウソだっ！」

「嘘じゃねーよ」

遙が、少々苛立った様子で言う。

「デメエらの母艦も、さっきエンジンぶっ壊して停止させといた。もう決着はついてんだよ」

「う、うそ……」

「嘘じゃねえつつてんだろ！ ここでグダグダ言ってる暇があんなら、さっさと戻って仲間の救助の手伝いをしろよ。そういうルールだろうが。それとも、ここでアタシら全員とやりあうってのか？」

ああ？」

そう威嚇する声にも表情にも、不良少女を通り越して、ギャングの姐御とでもいうような凄みと風格が滲み出している。

「うっ……」

アンは言葉の内容より、むしろ遙の剣幕に怖れをなしたようで、目に涙をためて、いまにも泣き出しそうな顔つきになった。

「ふええ……」

「あー、ハルカちゃん、ダメだよ泣かしちゃー」

真里があわててレインボーブルームをアンのそばへ寄せ、そつとささやきかけた。

「泣かないで。えっと……ほら、これ、あげるから。ね？」

ポケットからキャンディを一粒取り出し、示してみせる。

「う……い、いらないもん」

「すっごくおいしいよ？ ちょっとすっぱくて、あまーいの」

「……あまいの？」

「うん。あたしの大好物。わけてあげるっ」

真里は、花のような笑顔で、丁寧に包装されたキャンディを手に乗せ、さしだした。

アンは少し戸惑うような素振りを見せたが、やがて、指先でこわとキャンディをつまみあげた。

「ね、食べてみて」

うながされて、包装を解き、桜色のキャンディを口に含む。

数秒の沈黙。

真里をはじめ、場の全員が成り行きを注視するなかで、アンの頬に、ふと、薄い朱がさした。

「……チエリーの、味」

小さな唇が、かすかにほころぶ。

「えへへ、せーかい。おいしいでしょ」

「うん、おいしい。ありがとう」

ようやく、アンは微笑んだ。

「ね、お名前、教えて。あたし、マリっていうんだよ」

「アン。アン・ベックウエルよ」

「アンちゃんかー。かわいい名前だねー」

「そ、そんなこと」

照れくさそうに、アンはうつむいた。

「マリ……ちゃん、あの、さっきは……ごめんね……」

「戦いだもん、しかたないよ。でも、もう終わったから、いまからお友達だよ」

「お友達？」

「そうだよ。だって、戦わなくていいんなら、仲良くなれるでしょ。ね？」

真里の笑顔には、一点の曇りも欺瞞もない。太陽そのもののような、まっすぐな明るさだけがあつた。

アンはまぶしそうに目をほそめ、素直にうなずいた。

「そうね、その通りね」

真里が、ぱつと手をさしのべる。

「お友達になるう？ アンちゃん」

「——っん！」

二人はしつかと手を取り合い、ほがらかに笑いあつた。

「マリちゃんの得意技……はじめて見たけど、想像以上ね……」

やや離れた位置から様子を見守っていた祐美が、呆れ顔でつぶやく。

「ああ。アタシも噂にや聞いてたけど、これほどとは……」

遙が応える。

「力づくじゃなくて、心を攻める。相手の心を撃墜する。それで、どんな敵でもオトモダチにしちまう、ってな」

「ええ。聞いた話じゃ、以前、中国海軍との戦いで散々あれをやつて、おかげで中国海軍の魔法少女のうち三分の一近くが、戦意喪失、自主退役しちゃったって話よ。マリちゃんとは戦えない、って」

鈴がなにやら深刻げに眉をひそめる。

「……あの子の凄いところは、それを計算じゃなく、天然でやつてることね。誰も勝てないわ、あの子には」

真里とアンはすっかり打ち解けた様子で、なにかお互い語りあつ

ている。祐美たちは高度を落とし、二人のもとへ近寄った。

「その、悪かったな。つい怒鳴っちまって」

遙が、少々ばつが悪そうな様子で、アンに声をかけた。

アンは、ぷるぷると首を振った。

「こちらこそ、ヒキヨウとか言つて、みなさん、ごめんなさい」

「そんなの、気にしないでいいよ」

美佳が笑つて言う。

「それより、そろそろ母艦に戻ったほうがいいよ。きっとあなたのこと、心配してるよ」

「あの、お姉さまたちは……」

「大丈夫、みんな大した怪我はないはずよ」

祐美がおだやかに告げた。

「行つて、早めに救助してあげて。私達はまだ作戦の途中で、もう戻らないといけないから、あとをお願いするわね」

そう諭すと、アンは、少しうつむきながらも素直にうなずいた。

「アンちゃん、ちょっとだけ待って」

真里が引き止める。

「んー、と。あつた、これこれ」

真里は、ポケットからマッチ箱大の携帯端末を取り出した。

「アドレス交換、しょー！」

笑顔で提案する。

アンは「うん、よろこんで！」と、嬉しそうに応じた。

二人が、端末を突きあわせ、同時に認証ボタンを押す。

軽快な電子音とともにメールアドレスの交換が行われた。

「これで、いつでも会えるね」

アンは、端末をそつと撫でて、大切そうにポケットへしまい込んだ。

「うん、何かあつたら、メールちょうだいね」

「マリちゃんもね。約束だよ」

二人は、ひとしきり微笑みあつた。

アンは最後に、一同へ、ぺこりと頭を下げ、エプロンドレスをひるがえして、ゆっくり立ち去っていった。

「えへへ、またお友達、ふえちゃった」

真里は上機嫌で端末を握りしめた。

「撃墜記録、更新ね……」

鈴がぽそりと呟く。

「え、リンちゃん、なに？」

「なんにも」

美佳が横あいから声をかける。

「あたしたちも、もう帰らなきゃ。サナお姉ちゃんもきつと心配してるだろうし」

「ま、そうだな。ハラも減ってきたし」

「今日のお昼ごはん、なにかなー？」

「帰ってからの楽しみよ。さ、行きましょ」

五人は一群となって、いずみの航走する北北西へと引き返しはじめた。

母艦ロドネー上空まで、あと十数マイル。

アンは帰途を急ぎつつも、繰り返し、エプロンのポケットの上から端末に触れて、そのたび心底嬉しそうに小さな口もとをほころばせた。

「おじいちゃんに報告しなくっちゃ。新しいお友達ができた、って」
天駆けるさまも浮き浮きと楽しげに、アンは南風をうけながら飛び続ける。

——不意に、衝撃が来た。

直上の空から、太い光の束が降り注ぎ、アンの背を打って海面へ叩き落とした。

アンは、何事と覚る間もなく気を失い、うち捨てられた人形のように、たちまち波間へ漂いはじめた。

はるかな高みから、ゆるゆると、ひとつの人影が海面上へ舞い降りる。

しなやかな長身を純白まばゆき長衣に包み、風になびく黄金の髪、右手には両刃の騎士剣が、魔力の残滓をまとわせ銀色に輝いている。碧き双眸は、熱もなく感情もなく、白浪に翻弄されるアンの姿を、ただ冷ややかに眺めおろしていた。

アメリカ海軍太平洋第七艦隊、第二十九任務部隊所属――。
「ユタの剣姫」メル・トケイヤー、その人である。

第七魔法戦隊と英艦隊との小戦闘は、時間とすれば、わずか十分ほど。

部隊としての初陣を遺漏なき完勝で飾って、いずみの魔女っ子たちは意気高らかに母艦へと帰還してきた。

艦橋にその報がもたらされると、早苗はようやく緊張を解き、安堵の吐息をついた。

自身、初の戦場経験で、当然その心理的圧迫や、万一という事態への怖れなどもあったが、それ以上に子供たちが怪我でもないかと、内心が気でなかったのである。

やがて、廊下から複数の靴音が響き、あれよという間もなく、五人の少女が元気に艦橋へ駆け込んできた。

皆すでに変身や武装は解いており、普段の姿に戻っている。

「ばーんっ！」

そのまま勢いよく、美佳が早苗の胸にとびこんでくる。

「おかえり、美佳ちゃん、みんな」

「へへへ、勝ったよ、あたしたち」

「うん。よく頑張ったね。怪我とかしてない？」

「ううん、全然だいじょうぶ」

嬉しそうに報告する美佳の髪を、早苗はそっと撫でてやった。

「あ、ミカちゃん、なんかずるい」

「にゃー」

「そうだよー、あたしたちもガンバったのに、艦長さんひとりじめ」

「あたしもなでなでしてもらうー」

「ハルカちゃん、艦長さん困っちゃうでしょ、そんなくっつかないの」

と、他の四人も早苗をとり囲んで口々に騒ぎたて、まことにかしい。

ここで有田少佐が咳払いをひとつ。

「勝って嬉しいのはわかりますが、手順というものがあります。まず、それを踏まえてくださいね」

いずみの魔女っ子たちは現在、第七魔法戦隊司令部の指揮下にある。帰還後は、まず戦隊司令のもとへ報告に向かうのが、一応の筋というものであった。

「そうね。みんな、提督のところへ行つてあげて」

早苗が促すと、五人はまだ何やかやとさえずりながら、連れだつて艦橋後部へ歩いていった。

「ずいぶん懷かれてますね。初対面から、まだ日も浅いですが」
有田少佐が感心したように述べる。

「そうねえ。なんでかな、何も特別なことはしてないんだけど」
早苗は小首をかしげつつも、まんざらでもない面持ちである。

懷かれて単純に嬉しいというのもあるが、もとより親子同然の美佳はさておき、早苗はこのとき、他の子供たちにも、不思議な相性の良さを感じていた。

「なに、簡単なことですよ」

草川主計長が背後から歩み寄りつつ、声をかけてきた。

「子供つてのはね、うまいメシを食わせてくれる人には、素直に懷くもんです」

「そ、そういうもんですか？」

「そうですね。で、艦長、いまちょうど昼食分の仕入れをやつてりましてな。こいつがそのリストです」

草川主計長は、薄いファイル型のパネルを開き、ご検分をとばかり差し出してくる。

早苗はしばし、やや表情をあらためてパネルの表示内容を眺め渡していたが、やがて小さくうなずいた。

「全部揃ってます、問題ないですよ」

「合格ですか、それはなにより。ではそろそろ、烹炊所へおいで下さい」

「わかりました」

と、言いもあえず、子供たちが早苗のもとへ戻ってきた。

「艦長さん、今日のお昼は、なーに？」

遙が、おっとりした笑顔で尋ねてくる。

「フィッシュ・アンド・チップスよ。お魚の白身のフライね」

早苗が答えると、真里が「えー、おサカナきらい」と、腰をくねらせた。

「だいじょーぶ」

美佳が、自信満々に真里へ告げる。

「サナおねえちゃんのフライはね、すうーっごく、おいしいんだよ

！ あたし、大好きなんだ」

「……ほんと？」

「うん、ほんと！」

ふと、有田少佐がうなずいてみせる。

「確かに、あのフライは絶品でしたね……」

「でしょ？ほんとにおいしいよね」

「ええ。あの、サクっ、シュワっ、とくる食感が、もうなんとも」

「そうそう！」

なぜか意気投合している。

その様子に、早苗と草川主計長は、つい苦笑をかわしあった。

「それじゃ、そろそろ行つて来るから。みんな、待っててね」

そう子供らへほほえみかけ、早苗は艦長席を離れた。

「お魚、好きだから……期待してます」

「にゃー」

「がんばってねー」

「ほらハルカちゃん、艦長さんに、行つてらっしゃいって」

「うん、いつてらっしゃーい」

などと、もろもろの声援に送られ、早苗は足取り軽く上機嫌で炊炊所へと向かつていった。

「これは……」

昼食時、士官室。

大皿にたつぷりと盛られたフィッシュ・アンド・チップスを眼前に、塚口提督はやや鼻白んだ様子で呟いた。

皿には丁寧なワックスペーパーが敷かれ、大ぶりの白身のフライが、フライドポテトとともに豪快に積み上げられている。

フィッシュの脇にはレモンが添えられ、隣の皿にはグリーンサラダが盛られ、彩りや栄養バランスについては一応考慮されているように見える。

味付けとして塩とビネガーの小瓶、タルタルソースが並び、ドリンクにはミルクティー。

「まさか、士官室でチップスの気分を味わえるとはな」

塚口提督は苦笑しつつ言った。

フィッシュ・アンド・チップスはイギリスの伝統的ファーストフードで、チップスはそれを専門とする軽食スタンドをいう。

「わが海軍の開闢以来、初めてじゃありませんかね。軍艦の士官室で、こういう食事が出るというのは」

湯山副司令は、なにやら楽しげに皿を眺めている。

「……大佐、やけに嬉しそうだな」

「いや、軍医の芦田くんから、艦長のフィッシュフライは絶品と聞いておりましてな。さてどんなものかと」

彼らの周囲は、すでに興奮の坩堝と化している。

列席する二十名ほどの幹部将校らが、揃いも揃って溜息まじりの賛辞を飛び交わせ、誰もすっかり夢中になって、一心にフィッシュフライにかじりついていた。

特に子供たちの喜びようといったら、ひと口食べては嬌声をあげ、互いに感想を述べあつて、またひと口食べては顔をほころばせ、と実に幸福そうに見える。有田少佐も、艦の幕僚たちとともに、ひと口ごと、会心の笑顔をほじけさせている。

塚口提督は、ふむ、と首をかしげつつ、レモンを絞り、塩少々とビネガーを振り、ワックスペーパーを畳み、フィッシュを包んだ。一応フォークが添えられているが、お構いなしに右手につかんで持ち上げ、そのまま豪快にかぶりつく。

たちまち、鋭い双眸に驚色がみなぎった。

「なんと……！」

料理としてみれば、素朴を通り越して粗野とさえ思わせる見た目だが、衣は香ばしく食感軽やかに、中身は汁気たっぷりと、淡泊ながら奥深い鱈の味わいをじんわり上品に引き出し、後味も油っ気を感じさせぬほど爽やかである。

「こいつは驚いた……」

塚口提督は、大いに唸った。

「おお、こりゃ想像以上だ」

湯山副司令も喜悦満々に絶賛する。

「本場のイギリス人でも、こんな旨いフライは食ったこともありませんまい。いや大したもんですな」

「ああ……」

塚口提督は、なにか複雑な顔つきでうなずきながら、ミルクティーをすすり、フライドポテトをつまみあげた。

「お茶のおかわり、いかがですか？」

ふと横あいから、さりげなく声をかけてきた者がいる。

見れば、早苗がティーポット片手にたたずんでいた。

「艦長みずから給仕とは……これは、恐れ入る」

おだやかに応える塚口提督へ、早苗は一見、愛想よく笑ってみせた。

が、その目は笑っておらず、むしろ真剣そのものである。というのも。

戦隊の発足から三日、早苗はすでに幾度か塚口提督ら第七戦隊首脳部と食事をともにしているが、その提督から、いまだ一度も、自分の料理の感想を聞いていなかった。

もとよりどこか気難しげな風情のある人だが、これが食事となると一層黙然たるものあって、何を食べても、旨いとも不味いとも言わない。他の人々は、その様子から、だいたい喜んでくれているとわかるのだが、塚口提督だけは、まるで意識にカーテンでもかけているかのようで、その内心を推し量るのも難しい。

早苗は少々不安にかられた——自分の腕前に自信はあるのだが、口にあわない可能性もある。もしくは、艦長たる身が本来の職務を放っておいて烹炊作業などにかまけているのが氣にくわないのかもしれない。

他にも、なにか至らぬ点があるのでは——と、考えれば考えるほど、つい悪いほうにばかり想像がいつてしまう。

ここは一度でも、提督から感想なり苦情なりハッキリと聞いておかねば、早苗としても落ちつかない。

で、ごくさりげなく、提督の評価を引き出してみようと、給仕のふりして近づいてみた次第である。

実際に提督のもとへ立つと、酷評への不安と、それ以外の何かのために、不意に緊張が高まり、動悸は乱れ、耳朶は熱く、平静さを保つのになかなかに苦勞を強いられた。

それでもなお、にこやかな笑顔をつくり、快活な声で、しかし実際に喉の奥から言葉を絞り出すように、ようやく、ひとこと尋ねた。

「フライのお味……、いかがでしょう」

わずかな間を置き、塚口提督は、重厚な声と態度でもって、こう

答えた。

「見事な、お点前……」

そして精悍な口もとをかすかにほころばせる。

その表情を至近に見て、突如、早苗の心臓が、ひときわ高らかな鼓動を打った。

――褒めてもらえた。間違いなく。

それは嬉しいが、たったこれだけの出来事で、なぜこつも気分が昂揚するのかよくわからない。

学生の頃あたりによく経験したような、胸の奥が小刻みに締めつけられる、独特の感覚。早苗は内心、大いにうろたえはじめた。

意識の片隅には、なお少々不満な気分も残っている。

（茶道じゃあるまいし……普通に褒めてくれたらいいのに）
嬉しさと、不満と、当惑。

むろん、早苗とて一応、立派な成人女性のつもりであるから、そう取り乱した内心はおくびにも出さず、いや出さないつもりで、見た目は優雅に一礼し、「ありがとうございます」とだけ呟いた。

かすかに震える手で提督と副司令のカップにミルクティーを注ぎ足すと、再び一礼し、そそくさとその場を離れ、何やらおぼつかない足どりで烹炊所のほうへ駆け去ってゆく。

「……急に、何を慌てているんだ、彼女は」

塚口提督は心底不思議そうに小首をかしげた。

いっぽう湯山副司令は、はや事情を悟ったらしい。

「若いのう」

ひとり頷くと、湯山副司令は、悠々とフライドポテトを口に放り込んだ。

第四話「魔法のフィッシュ・アンド・チップス」(後書き)

四話をお届けします。ようやくバトル展開。といっても今回はまだ偵察規模でしたが、次回は日米英の全面対決、いずみ空戦隊以外の魔法少女たちも多数登場します。ご意見ご感想などございましたらお気軽にどうぞ。お待ちしております。いや本当にお待ちしております。はい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3085y/>

魔法少女戦艦いずみ

2011年11月28日02時51分発行